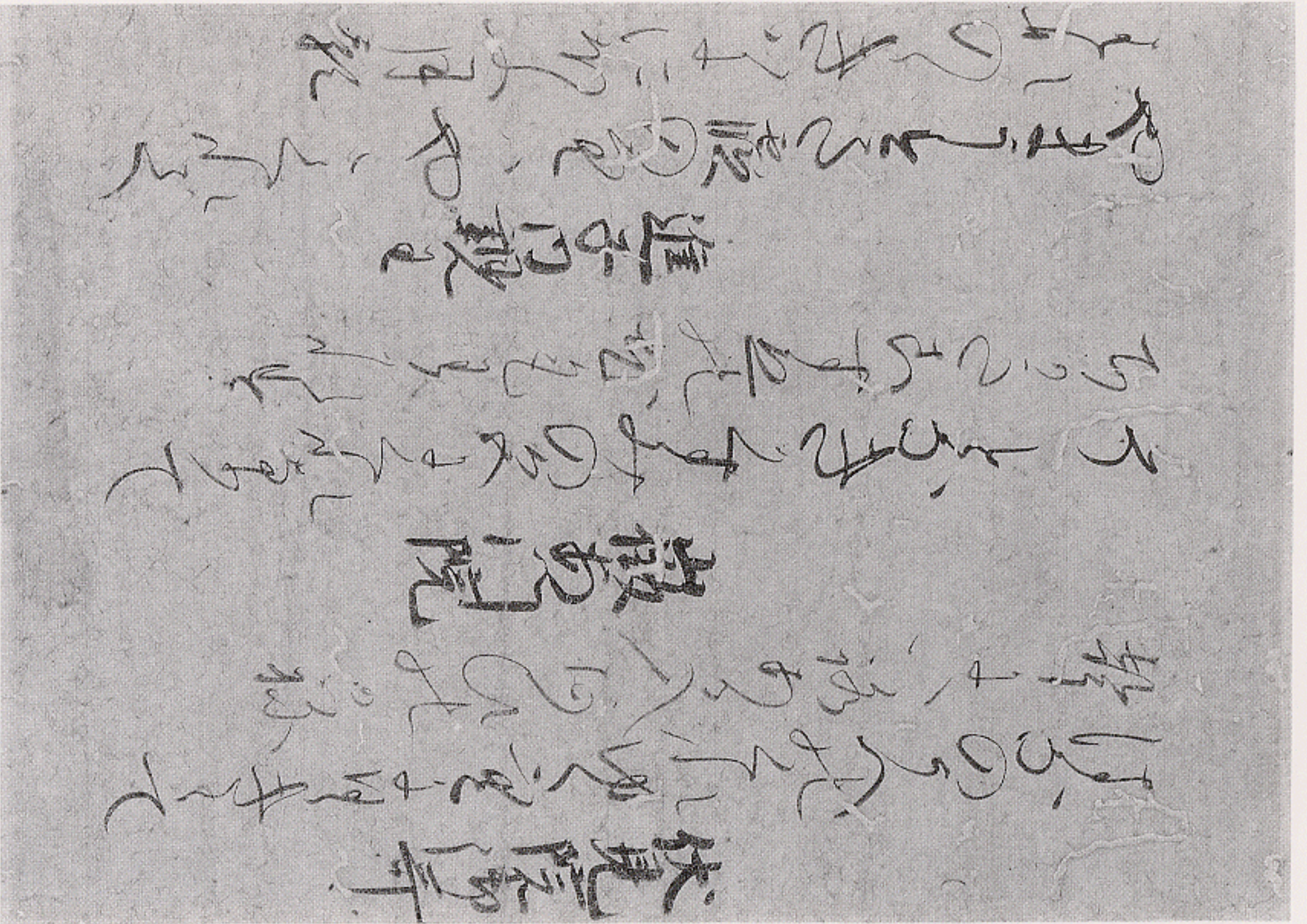


25 定家八代抄断简 (伝藤原為家筆)



24 風雅和歌集断简

おしんもいそそのおまにらうとて  
くららふふんいそいそ  
卒又書

右

凡海松

いほくもはらるひるはられく  
うさるうさる山を音ぬれ

右

禁部

みりやいさのうきよのうきよとて  
いすの穂くさる音ぬれ

又又書

右

すあううら松と秋のゆきあ  
いそいそやあつたまのうきよ

右

なまのうきよのうきよのうきよ  
あはのうきよのうきよ

28 時代不同歌合

撰歌合

嘉禄二年四月廿一日

家隆卿賜之

一番

九 初書

谷風のうきよのうきよのうきよ  
いそいそいそいそいそいそ

右

打るのうきよのうきよのうきよ  
いそいそいそいそいそいそ

九 谷風のうきよのうきよのうきよ

いそいそいそいそいそいそ

いそいそいそいそいそいそ

いそいそいそいそいそいそ

いそいそいそいそいそいそ

いそいそいそいそいそいそ

いそいそいそいそいそいそ

いそいそいそいそいそいそ

いそいそいそいそいそいそ

いそいそいそいそいそいそ

29 〔後鳥羽院御自歌合〕



Handwritten text in vertical columns, likely the preface to the 'Manyō Shū'.

34 万葉代匠記序 (契沖自筆)

万葉代匠記

十二

一日社人母... 鴨ノ後ト一史伝多様

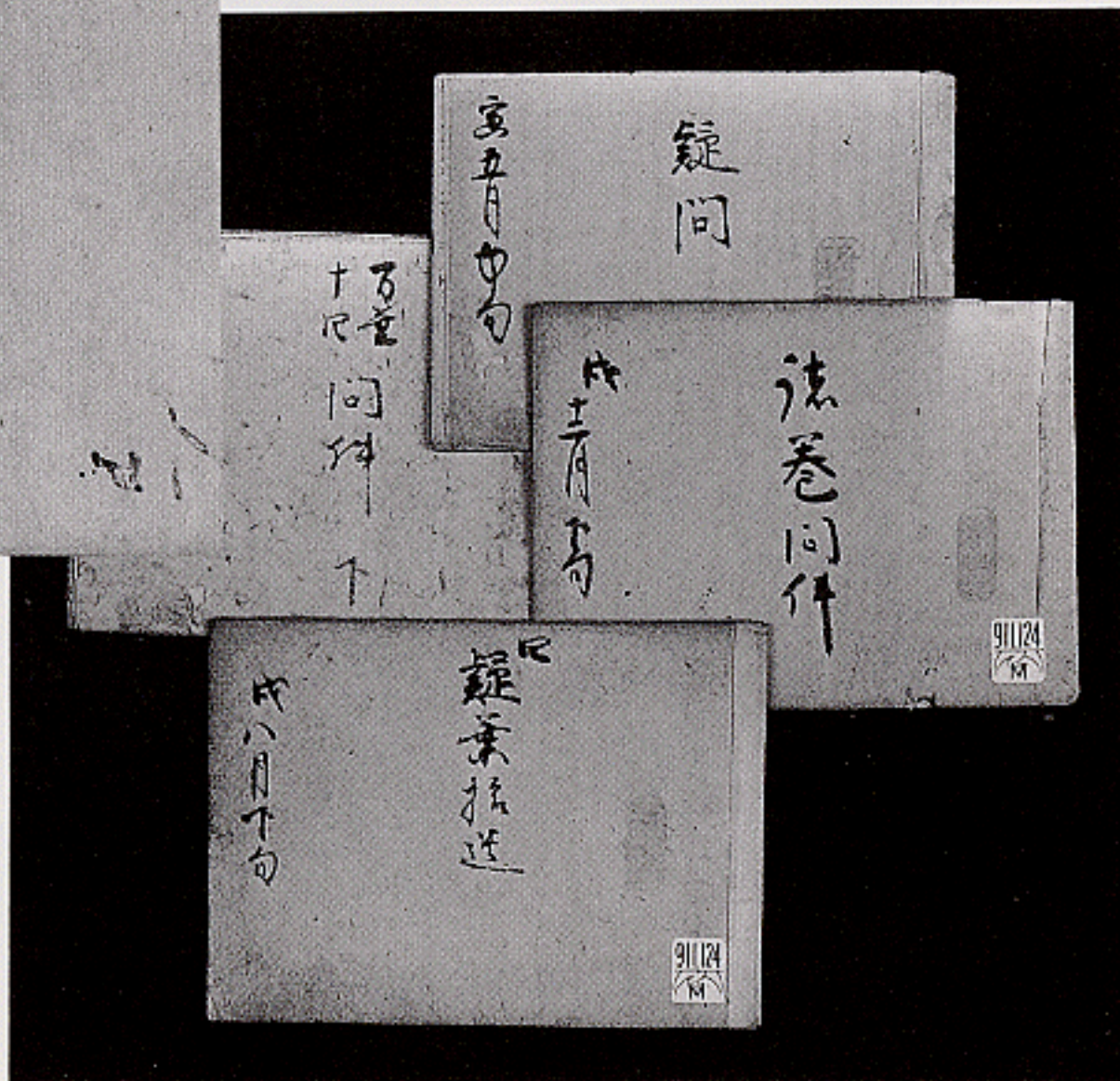
... 鴨トスルハ殊ニ異レ一説ニ備フニシ

... 如ク早待者ニ

市仲記...

...

35 万葉集問答 (田中道麿、本居宣長自筆)







雨中吟  
 十七首  
 未来記因前  
 後と  
 細なく  
 後  
 好  
 小  
 打

未来記  
 前和  
 山科言経筆  
 36016

40-2 [未来記雨中吟抄]

40-1 [未来記雨中吟抄] (山科言経筆)

詠歌大概  
 岡田賢桃筆

詠歌大概  
 大  
 情以新為先  
 名目  
 情者識也  
 識知也  
 定家卿  
 小書人  
 左

41-2 詠歌大概 [聞書]

41-1 詠歌大概 [聞書] (岡田賢桃筆)

老葉第八

雜連詩上

いふ山をさうよを血入里といふ  
句か  
いふ山をさうよを血入里といふ  
いふ山をさうよを血入里といふ  
いふ山をさうよを血入里といふ  
いふ山をさうよを血入里といふ  
いふ山をさうよを血入里といふ  
いふ山をさうよを血入里といふ  
いふ山をさうよを血入里といふ  
いふ山をさうよを血入里といふ  
いふ山をさうよを血入里といふ

いふ山をさうよを血入里といふ  
句か  
いふ山をさうよを血入里といふ  
いふ山をさうよを血入里といふ  
いふ山をさうよを血入里といふ  
いふ山をさうよを血入里といふ  
いふ山をさうよを血入里といふ  
いふ山をさうよを血入里といふ  
いふ山をさうよを血入里といふ  
いふ山をさうよを血入里といふ  
いふ山をさうよを血入里といふ

42-1 老葉 (伝荒木田守武筆)

賦行人連歌  
薄雪小本葉いりかたは  
思りやすきさるる所を  
ねりよととねりよとと  
たあけきりお袖の秋風  
さうり月といりやと  
かりいさるしね色のし末  
いふ山をさうよを血入里といふ  
いふ山をさうよを血入里といふ  
いふ山をさうよを血入里といふ  
いふ山をさうよを血入里といふ  
いふ山をさうよを血入里といふ  
いふ山をさうよを血入里といふ  
いふ山をさうよを血入里といふ  
いふ山をさうよを血入里といふ  
いふ山をさうよを血入里といふ  
いふ山をさうよを血入里といふ

42-2 湯山三吟





又りし春のこもやのらねの  
 らがしまの三年のわが影さう  
 ちと床とさうかたまははきり  
 浪のそよ松もく月よれをえ  
 おしひのうらわの音もおし  
 けり言ぬかたにさう海の里  
 ちてさうわもお梅とさうい  
 二の梅も中くく人いさす心  
 ちうさうらんをさうさうい  
 ちうさうらんをさうさうい  
 河船 第三  
 鳥のねん花よくらねりい  
 かすくくさうねんをわさう  
 窓らうと春の山おもゆる  
 ちうさうさうね月よれす  
 さうさうさうさうさうさう  
 人いさすさう秋もさうさ  
 いてやの旗のなうらお梅  
 ちうさうさうさうさうさ

45-1 三島千句 (伝宗祇自筆)

文明五年三月日お伊豆三島  
 千句  
 明應五年二月廿七日馬  
 左の千句は...  
 右の千句は...  
 左の千句は...  
 右の千句は...  
 左の千句は...  
 右の千句は...

45-2 三島千句

賊名所連歌

花のまゝさるさるや昔の山大和専順  
去る雪のいりかまじりうす大寂  
けまの夕日若はよ雪消え日  
まよりいらぬのすえれらるる日  
旅人志駒のさつらゆらぬ日  
なよりぬかやう三行な下三行



47-1 [宗祇名所百韻] (伝宗祇自筆)

いさうゆららのあつと花らうそ  
なれまやまやまやま大和  
かろゆらのさゆれあつたあ大和  
なまのりら大和  
なまやま大和  
平向の山れ林の夕大和

専順一  
宗祇の九

付箋廿四  
大和

47-2 [宗祇名所百韻]

賊名所連歌  
花のまゝさるさるや昔の山  
去る雪のいりかまじりうす  
けまの夕日若はよ雪消え日  
まよりいらぬのすえれらるる日  
旅人志駒のさつらゆらぬ日  
なよりぬかやう  
なれまやまやまやま  
かろゆらのさゆれあつたあ  
なまのりら  
なまやま  
平向の山れ林の夕

49 [聖廟法樂千句] 断簡

春夢草

八景  
立春

之乃父一 霞とさるやふ乃去  
 外ら守りし 花と一日に雪の春  
 夢よと海にさるや世乃去霞  
 一日よ古よりさるや世乃去霞  
 口守りしや言乃世ぬら今乃去霞  
 世の道なり

道しわ霞や言乃世ぬら今乃去霞  
 久しよめてあはれさるや世乃去霞  
 花と一日に雪の春  
 早春  
 花と一日に雪の春  
 玉津浦よりさるや世乃去霞  
 去乃とわの此の月松乃夢  
 古や去乃とわの此の月松乃夢  
 其思と春氷

63502

48-1 春夢草 (肖柏自筆)

永正十二年三月廿九日祝之

今更なることしや

書之

抄書二枚後

右牡丹草夫人等具十餘句  
 興之意今更抄之其行孔を  
 子に授け給ふ之  
 嘉永三年三月廿九日  
 日野 施

48-2 春夢草

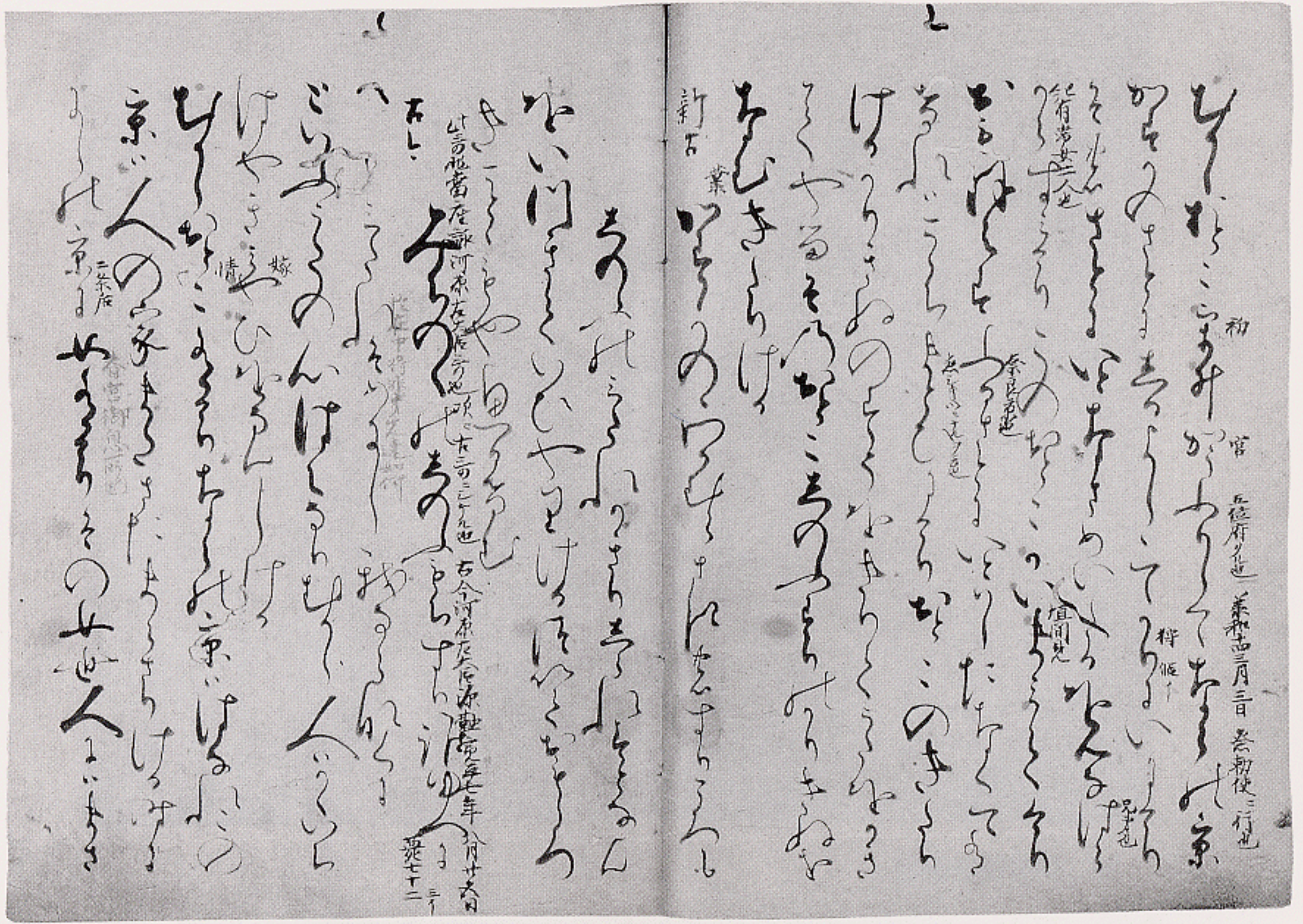
今一むつしをまわれば  
とてよのちの路しり  
よつと竹のまはらば  
スルをよこしむるを  
まよふてふしむるを  
よこしむるをよこしむる  
よこしむるをよこしむる  
よこしむるをよこしむる

50 竹取物語

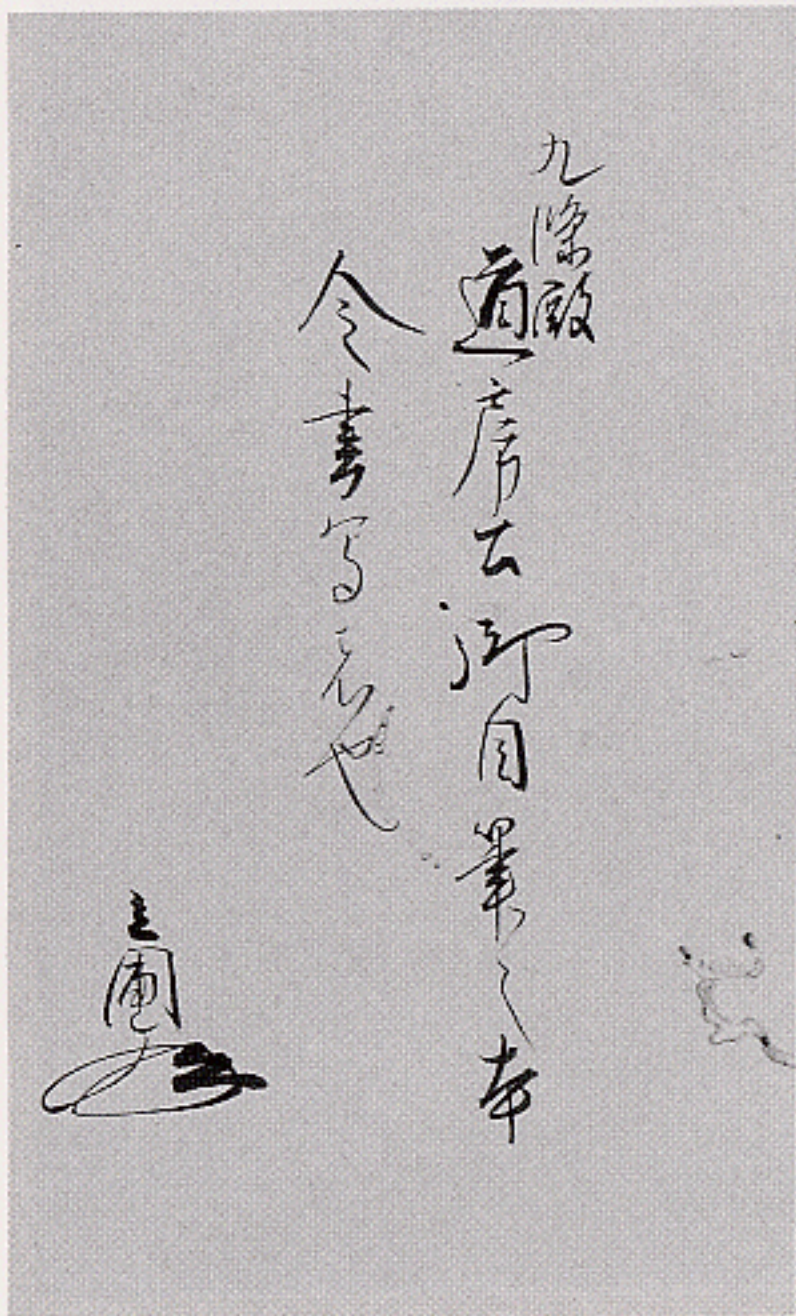
いづれかこのおもしろくありてありて京  
子うれしきふしからりてかりぬふし  
花の里よとありてありて女を舞うす  
なりこれおもしろくありてありては  
次もあつたおもしろくありてありて  
くらほいふしおもしろくありてありて  
よりきぬすもあつたおもしろくありて  
やぬれたおもしろくありてありて  
あつたおもしろくありてありて

まきのむらさき  
志すふしおもしろくありてありて  
わあじといふおもしろくありてありて  
かりといふおもしろくありてありて  
くらほくおもしろくありてありて  
よこしむるおもしろくありてありて  
いづれかおもしろくありてありて

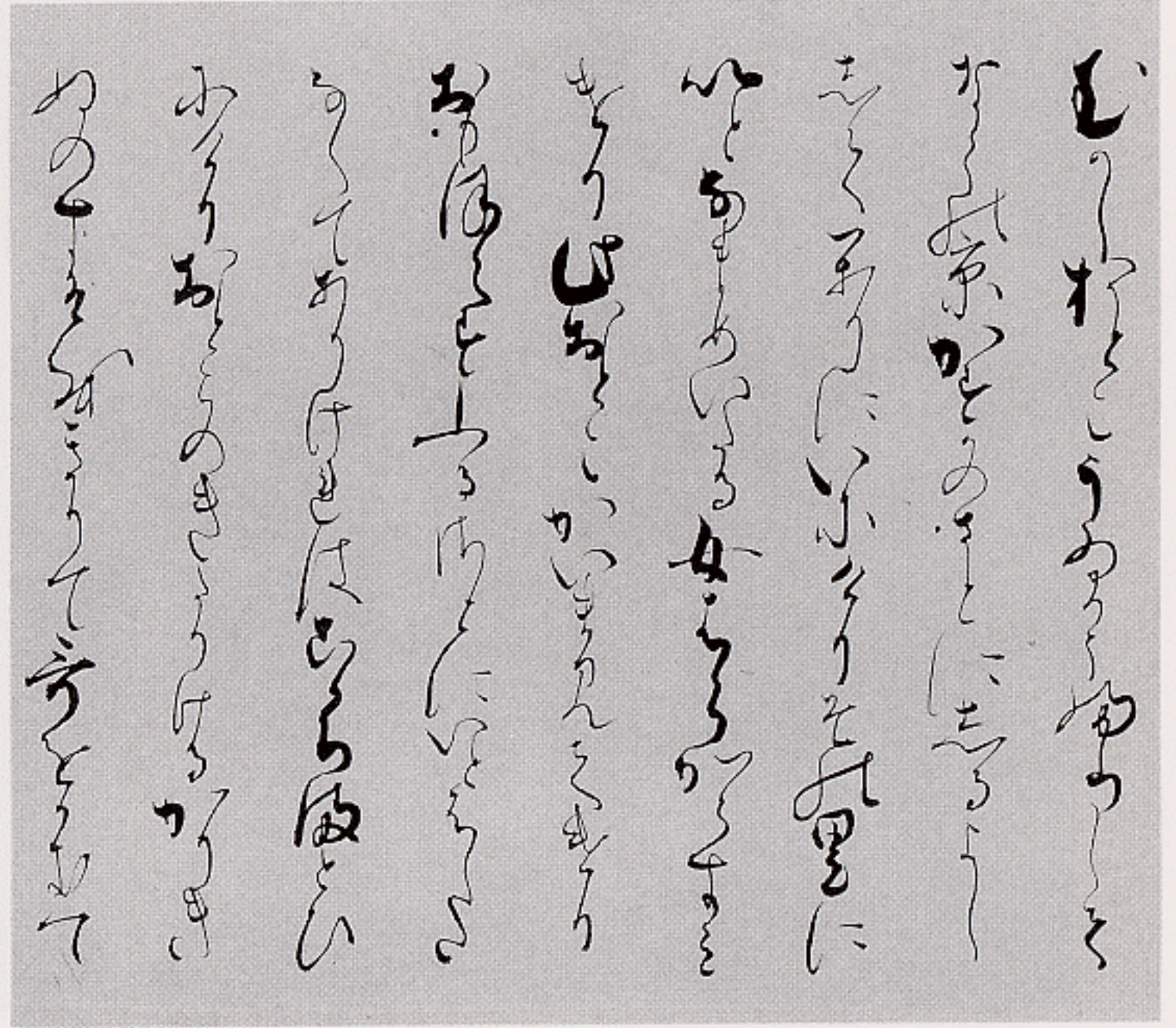
52 伊勢物語 (伝姉小路濟繼筆)



54 伊勢物語 (伝山崎宗鑑筆)



56-2 伊勢物語



56-1 伊勢物語 (野々口立圃筆)

礼有帝

伊勢

在系業平

三品強盛平河保朝臣の六男平兼光の  
皇子母は伊豆内親王と云ふが八の宮也

皇虎くらゐくくささるる  
あまのつりひのほはまよふ風をい  
ふはまきむのうまなる人  
又天和の徳蔭くし伊勢七条  
の在り作しつりてんを扱何  
と化てていひさるる

母者南子后三位し教のまけり業平  
月日左近の御息はにをまやうの  
二月は教人より後と云ふ二月  
七月は位下し身説ひひ二月は位  
上りひ二月は方きの行女と云ふ二月は  
左近の女お七年二月の右と程十一  
し三月は位下し二月は位下  
位下と云ふ之の二月は位下

59 伊勢物語系図

皇子位の御門下まのわらわぬま  
かんとすうらら弘敷殿のくよは伊勢  
子共たつて  
わらわらわらわらわらわら  
見れば人しものたふり  
とわらわらわらわらわらわら  
了みらつてわらわらわらわら  
わらわらわらわらわらわら  
とわらわらわらわらわらわら  
とわらわらわらわらわらわら

見しわらわらわらわらわらわら  
くわらわらわらわらわらわら  
とわらわらわらわらわらわら  
わらわらわらわらわらわら  
わらわらわらわらわらわら  
わらわらわらわらわらわら  
わらわらわらわらわらわら  
わらわらわらわらわらわら  
わらわらわらわらわらわら  
わらわらわらわらわらわら

60 大和物語 上

事子院乃法門の故をわたり舟路のひびんとする  
 也故弘徽後れ人より任務乃子のふまはけり  
 わの故まことひをわたりぬぬりしき成  
 思ふ事此なるうかひなり  
 とあわけまはみもは流ししきれりこりこふ  
 うきつきせなすひきふ  
 身ひのふわらぬくろり成りて入て  
 ゆき曲らわてもなすう思ふん  
 電人んわのきふ  
 みあをわわおほてふの年此のまはくりに流し  
 ぬてらうかく山かきし路ておこひひひひひ  
 備あのせうまをたらうかれりしきりひきり  
 人問よりおひりしきりしきりしきりしきり  
 しくは流しし路は流しし路は流しし路は流し  
 してきり人あもまをたたまてあわおひひひ  
 成りしきりし路は流しし路は流しし路は流し  
 かきりし路は流しし路は流しし路は流し  
 問よりわわおひりしきりしきりしきり  
 らせ路は流しし路は流しし路は流しし路は流し  
 ひきりし路は流しし路は流しし路は流し  
 わりし電んかきりし路は流しし路は流し  
 思ひてしきりし路は流しし路は流しし路は流し  
 とうこふよりわわおひりしきりしきりしきり  
 六とく

61 大和物語 上 古活字版

ひりし路は流しし路は流しし路は流しし路は流し  
 一人りし路は流しし路は流しし路は流しし路は流し  
 ちりし路は流しし路は流しし路は流しし路は流し  
 取みんとて又もよませは流しし路は流しし路は流し  
 色けりてし路は流しし路は流しし路は流しし路は流し  
 ぬりし路は流しし路は流しし路は流しし路は流し  
 かこまう人よあお時ちりし路は流しし路は流しし路は流し  
 とくし路は流しし路は流しし路は流しし路は流し  
 のしてあやうめつらりし路は流しし路は流しし路は流し  
 上  
 ひりし路は流しし路は流しし路は流しし路は流し  
 一人りし路は流しし路は流しし路は流しし路は流し  
 ちりし路は流しし路は流しし路は流しし路は流し  
 取みんとて又もよませは流しし路は流しし路は流し  
 色けりてし路は流しし路は流しし路は流しし路は流し  
 ぬりし路は流しし路は流しし路は流しし路は流し  
 かこまう人よあお時ちりし路は流しし路は流しし路は流し  
 とくし路は流しし路は流しし路は流しし路は流し  
 のしてあやうめつらりし路は流しし路は流しし路は流し  
 1024242

63 宇津保物語 俊蔭卷 古活字版

源氏物語 賢木巻

66 源氏物語 賢木巻

源氏物語 越国文庫旧蔵本

67-1 源氏物語 越国文庫旧蔵本

源氏物語

67-2 源氏物語



人忘れぬとて流流と物なりんこといふ流道  
 なること事おもむくわらわらたの世はま  
 してはまらふことおもむくわらわらたの世はま  
 なること事おもむくわらわらたの世はま  
 なること事おもむくわらわらたの世はま  
 なること事おもむくわらわらたの世はま

69 源氏物語 花散里卷 別本

申すの事事事事事事事事事事事事事事  
 申すの事事事事事事事事事事事事事事  
 申すの事事事事事事事事事事事事事事  
 申すの事事事事事事事事事事事事事事  
 申すの事事事事事事事事事事事事事事  
 申すの事事事事事事事事事事事事事事  
 申すの事事事事事事事事事事事事事事  
 申すの事事事事事事事事事事事事事事  
 申すの事事事事事事事事事事事事事事  
 申すの事事事事事事事事事事事事事事

68 源氏物語 滯標卷 別本

家朝老信可命不首馬筆  
 今書寫也  
 慶長十九年初拜中句  
 吉橋玄仲

70-2 源氏物語 松風卷

いらりりりりりりりりりりりりりりりり  
 いらりりりりりりりりりりりりりりりり  
 いらりりりりりりりりりりりりりりりり  
 いらりりりりりりりりりりりりりりりり  
 いらりりりりりりりりりりりりりりりり  
 いらりりりりりりりりりりりりりりりり  
 いらりりりりりりりりりりりりりりりり  
 いらりりりりりりりりりりりりりりりり  
 いらりりりりりりりりりりりりりりりり  
 いらりりりりりりりりりりりりりりりり

70-1 源氏物語 松風卷 (里村玄仲筆)

源氏物語 淀藩稲葉家旧蔵本  
 手紙の文は、流石に筆致が整然として、  
 墨色も濃く、字の大きさは、  
 読みやすい。文の内容は、  
 源氏物語の一場面を、  
 簡潔に描き出している。  
 墨の濃淡や筆の運びが、  
 文章の起伏を巧みに表現している。

71 源氏物語 淀藩稲葉家旧蔵本

源氏物語 奥入付 (伝徳大寺公維筆)  
 奥入付の筆致は、流石に筆致が整然として、  
 墨色も濃く、字の大きさは、  
 読みやすい。文の内容は、  
 源氏物語の一場面を、  
 簡潔に描き出している。  
 墨の濃淡や筆の運びが、  
 文章の起伏を巧みに表現している。

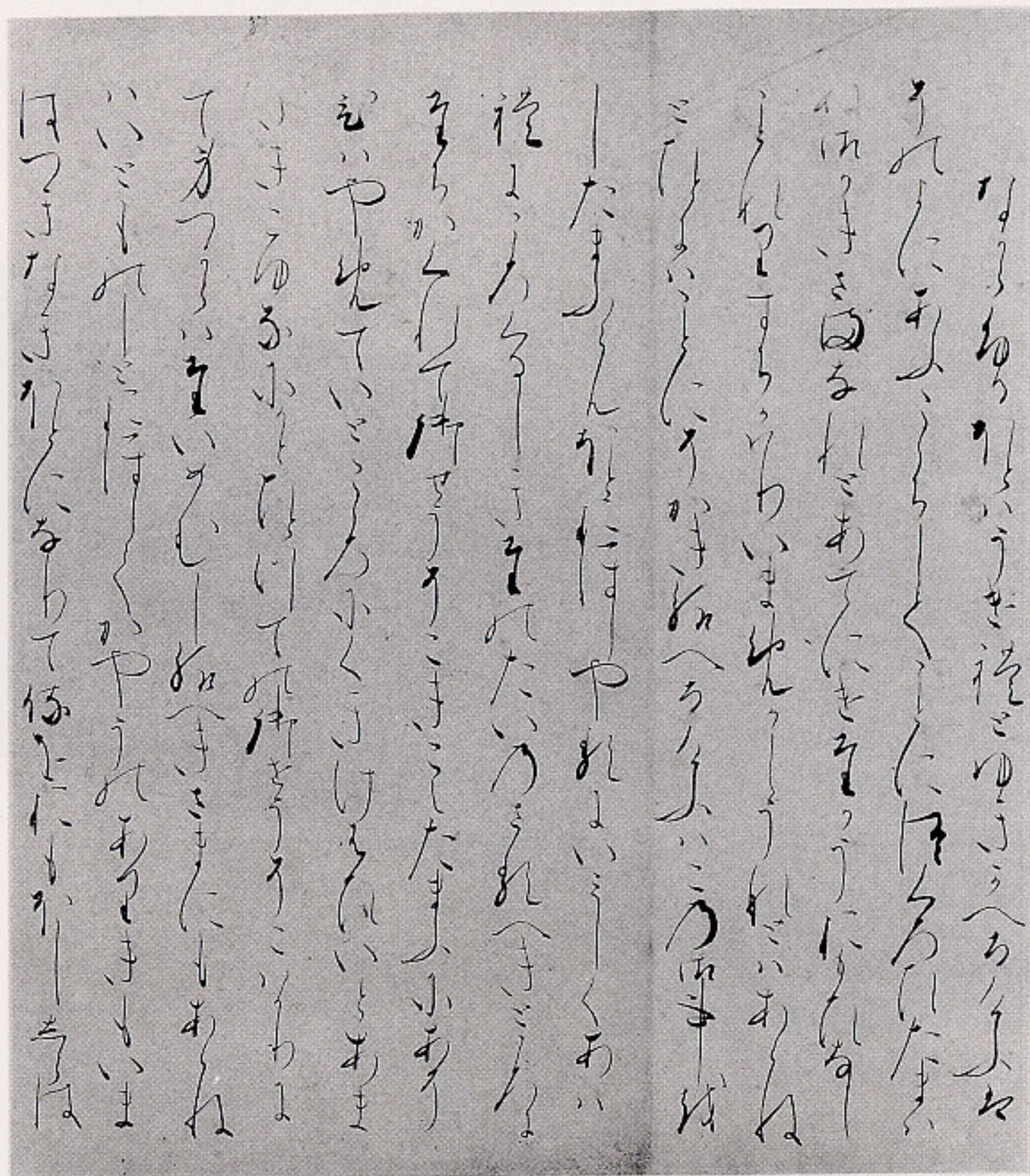
72-1 源氏物語 奥入付 (伝徳大寺公維筆)

俣竹  
 翠々待酒伴皆抱我雪月花時を憶君  
 俣毛可く度世奈可く度中又須支可徐也  
 和可由可波は知可た乃は知可た乃めめ  
 とや物あはしとたなとあまを座より  
 可た乃よりてまからむてたなと

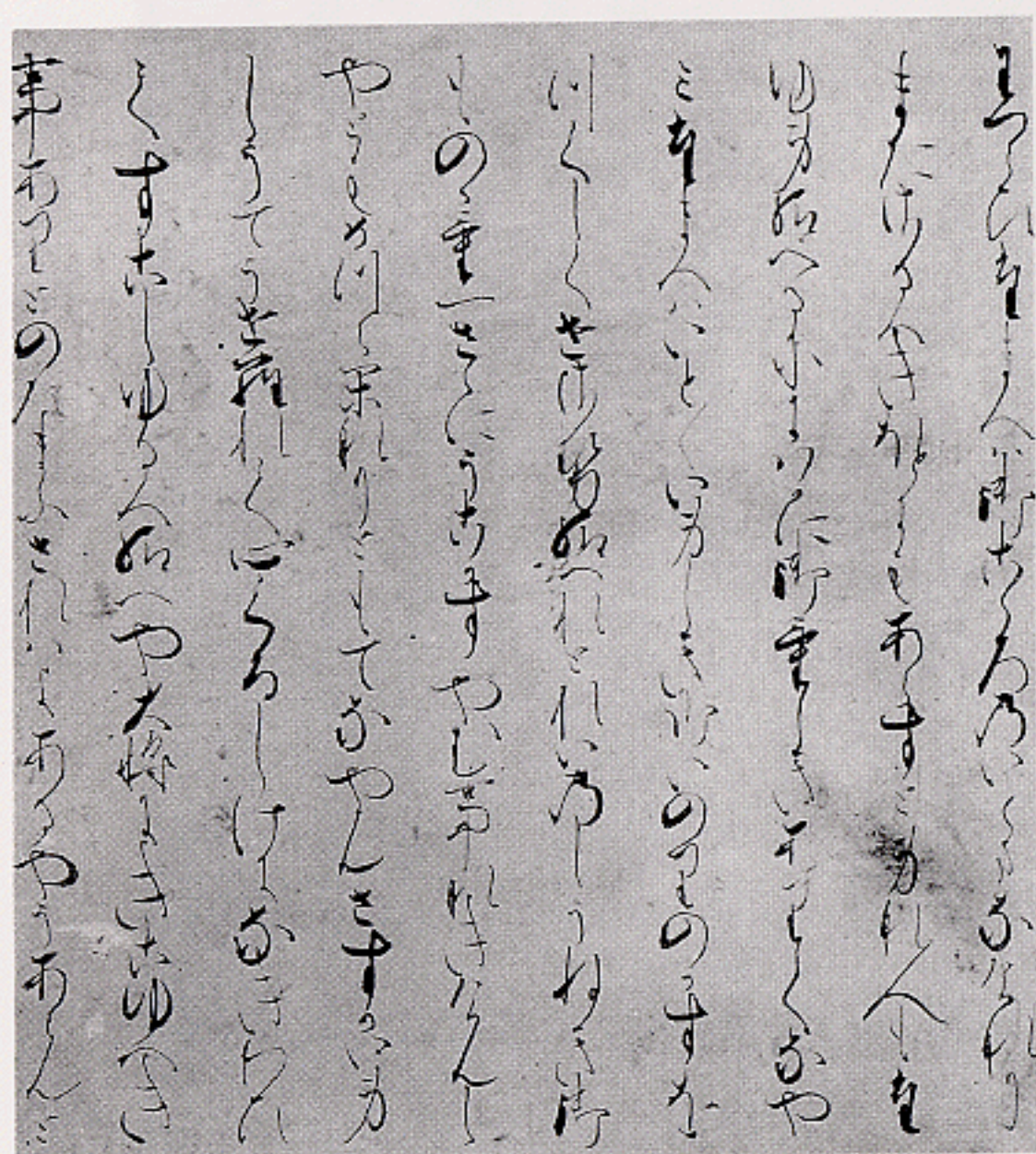
文集秦中吟  
 秋深煙火盡 霰雪白竹切者秋不散  
 老者體每温 悲端与寒氣併入鼻中辛  
 求子の声とすりめてみるこころさ  
 追はし  
 わるしななり  
 文集 卒二  
 北宗三友  
 今日北宗下 自何下わ 欣然得三友

72-2 源氏物語 奥入付

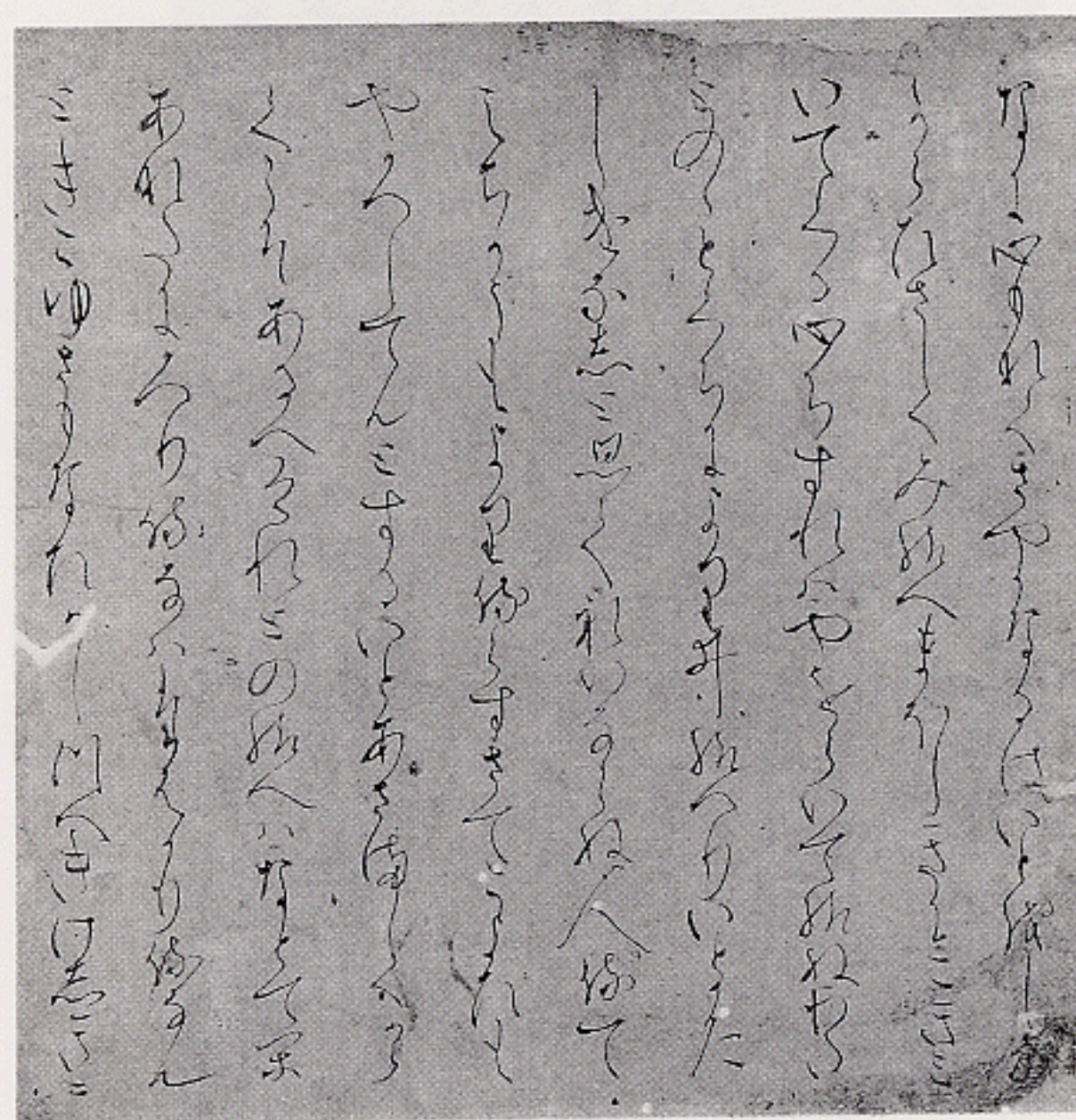




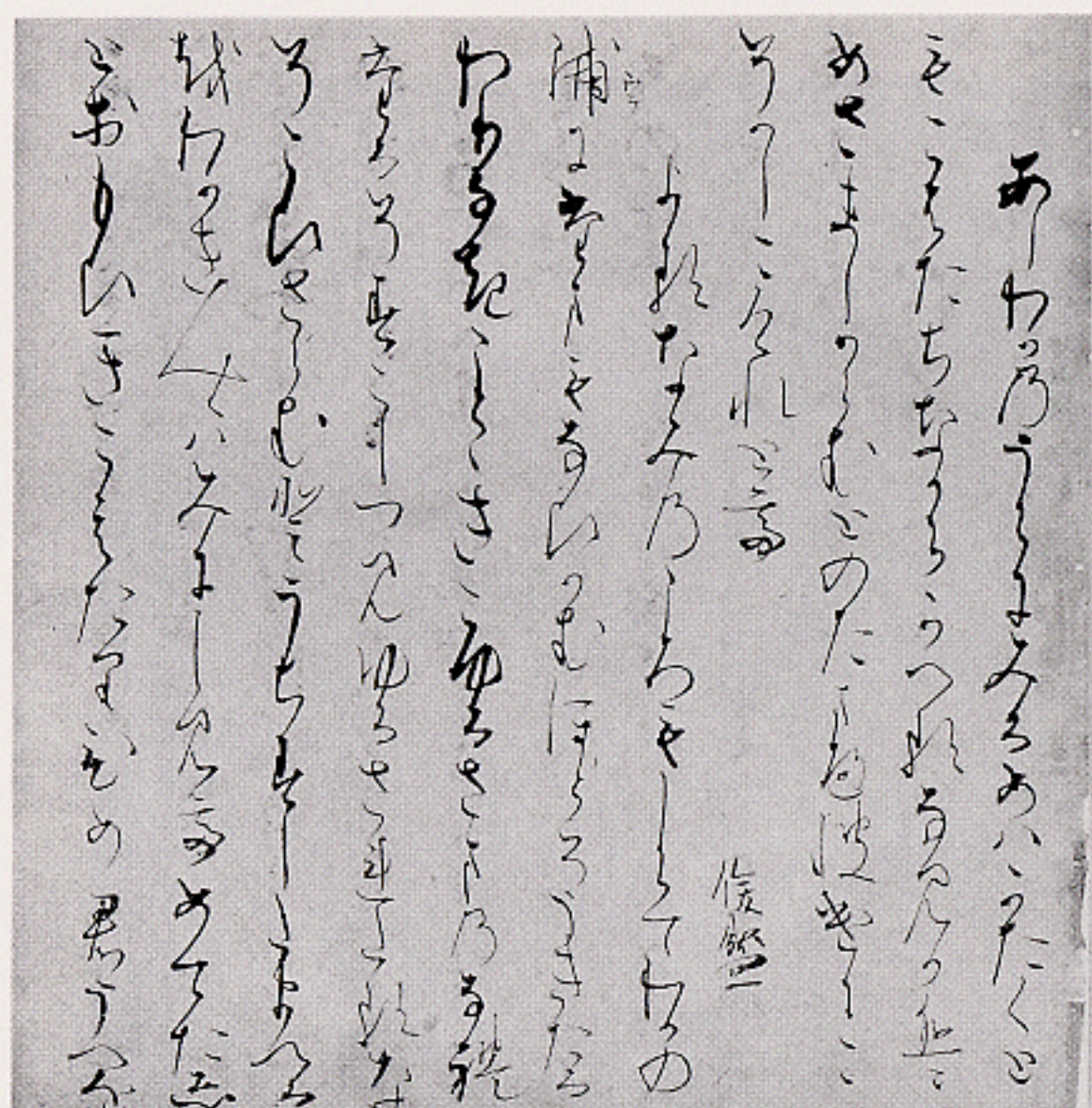
80 源氏物語断简 賢木卷 河内本 (伝藤原為家筆)



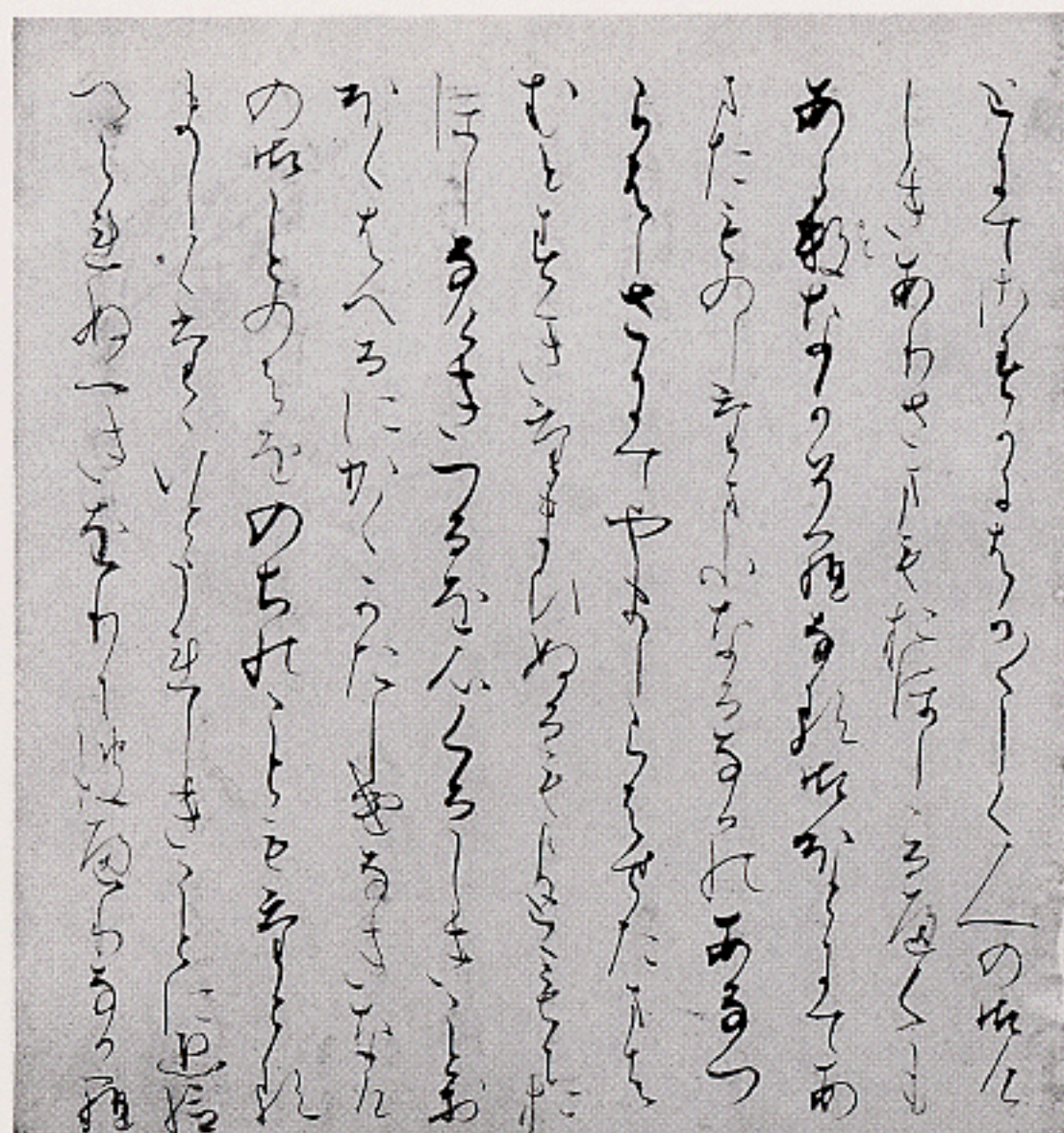
82-八 源氏物語断简 葵卷



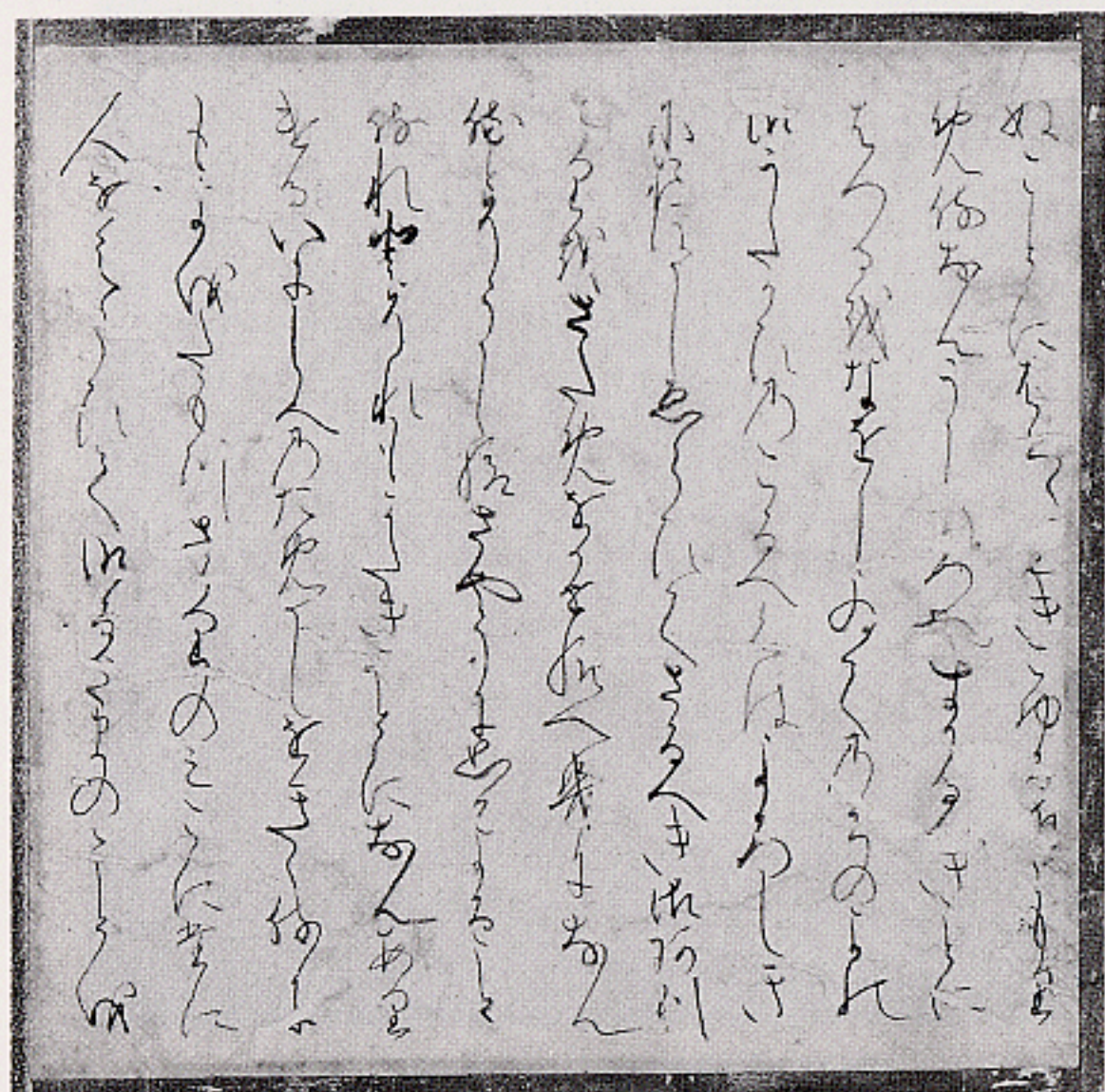
82-1 源氏物語断简 空蟬卷



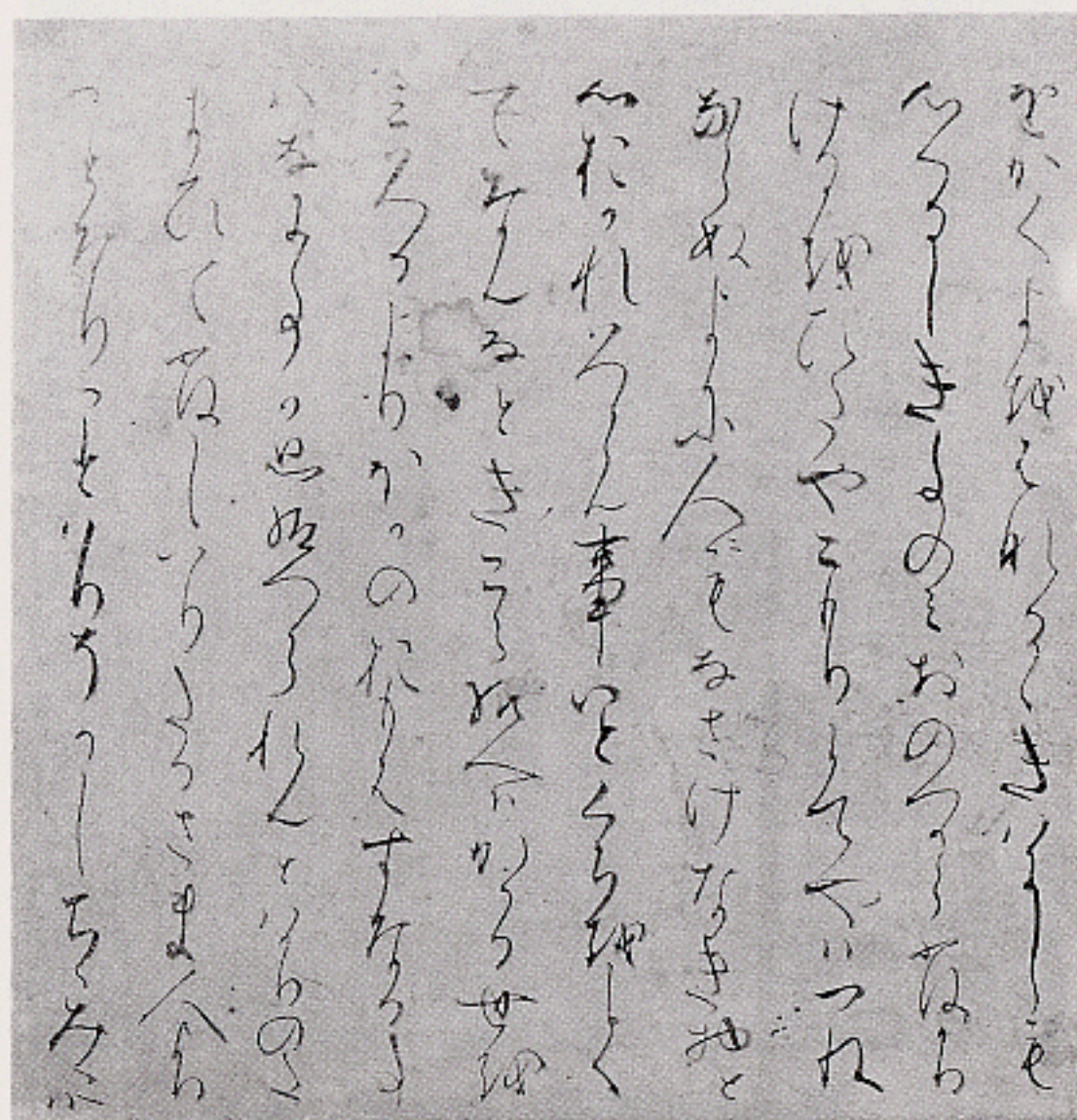
82-ロ-2 源氏物語断簡 若紫卷



82-ロ-1 源氏物語断簡 若紫卷 河内本  
(伝寂蓮筆)



82-ホ 源氏物語断簡 若菜卷 上



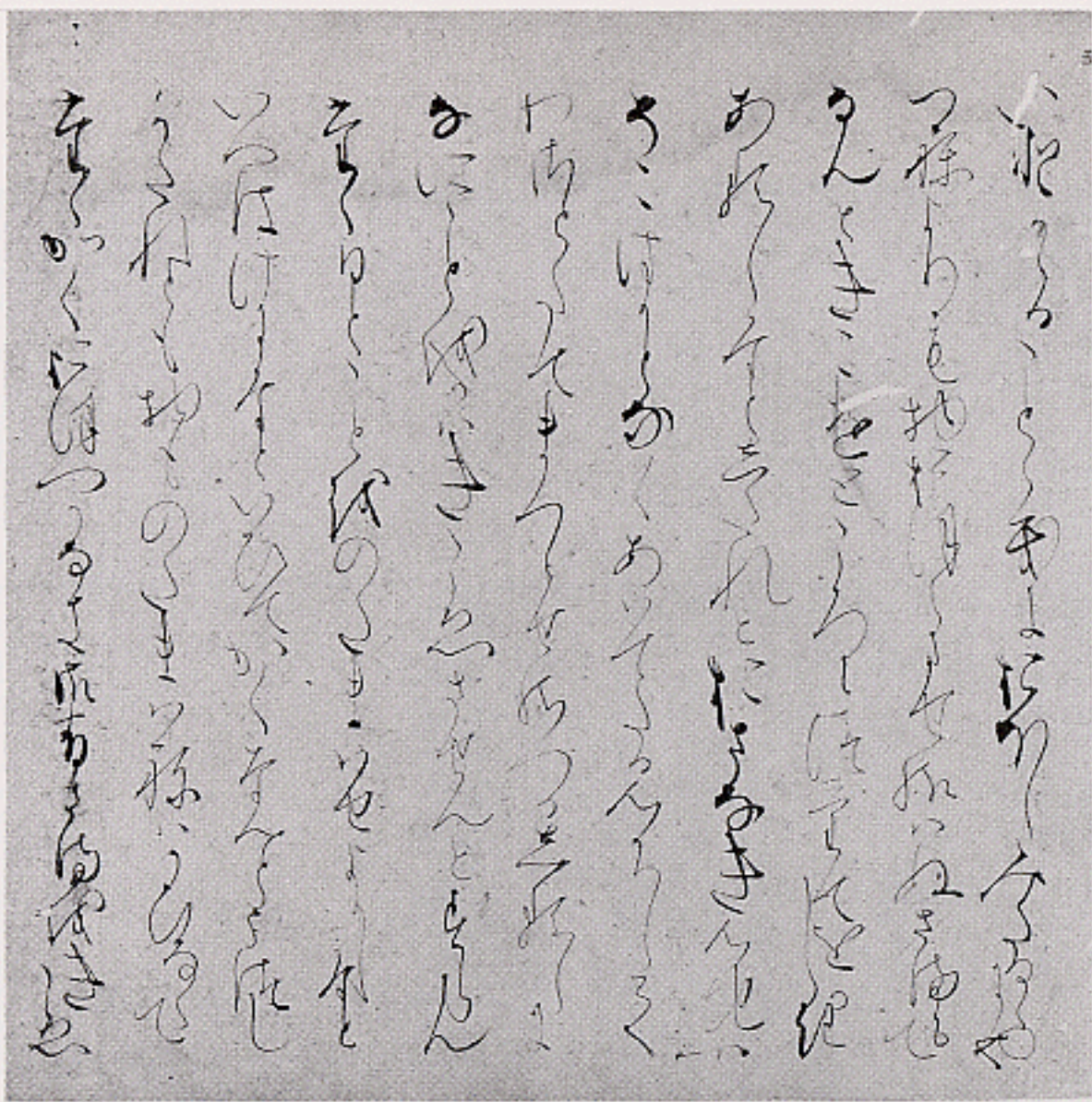
82-ニ 源氏物語断簡 須磨卷 河内本

源氏物語断簡 柏木卷  
 82-へ-2

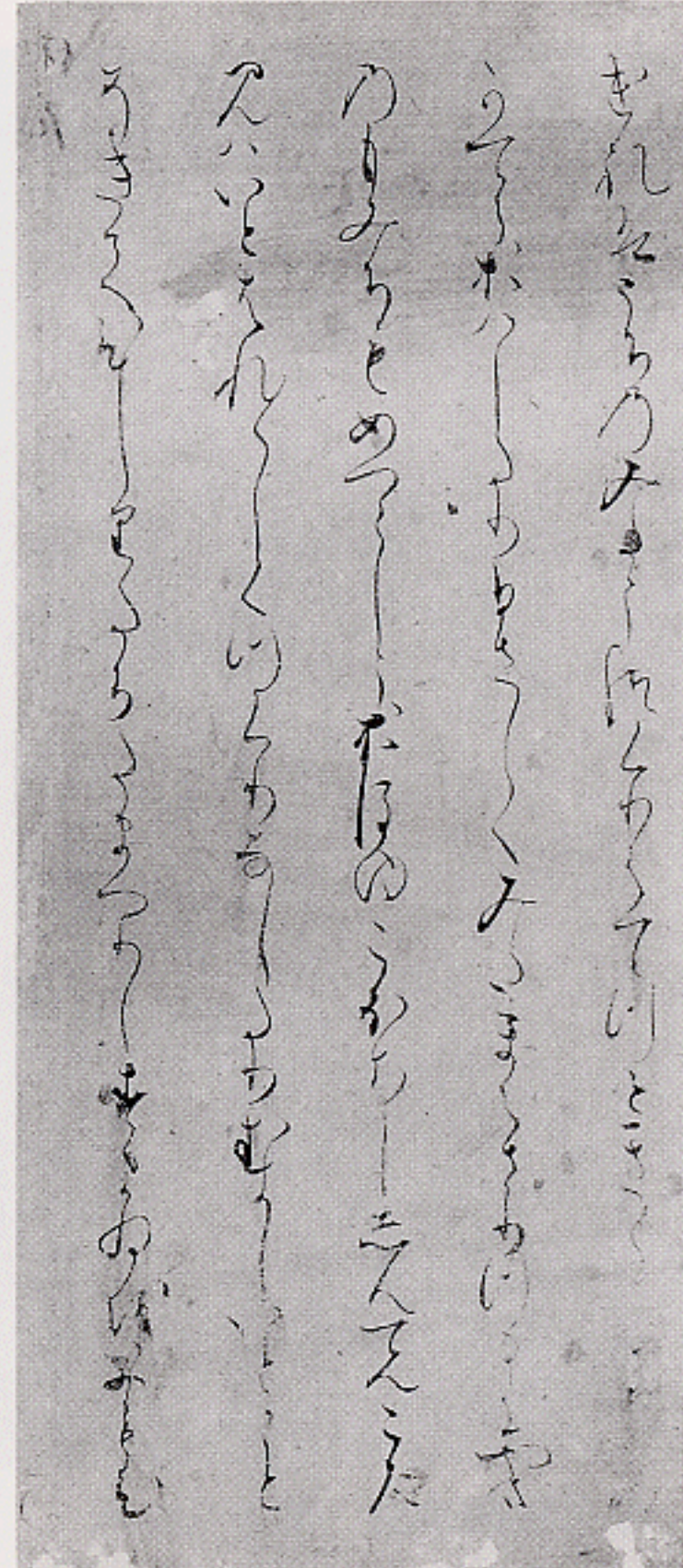
源氏物語断簡 柏木卷  
 82-へ-1

源氏物語断簡 宿木卷 別本  
 (伝藤原為家筆)  
 82-千

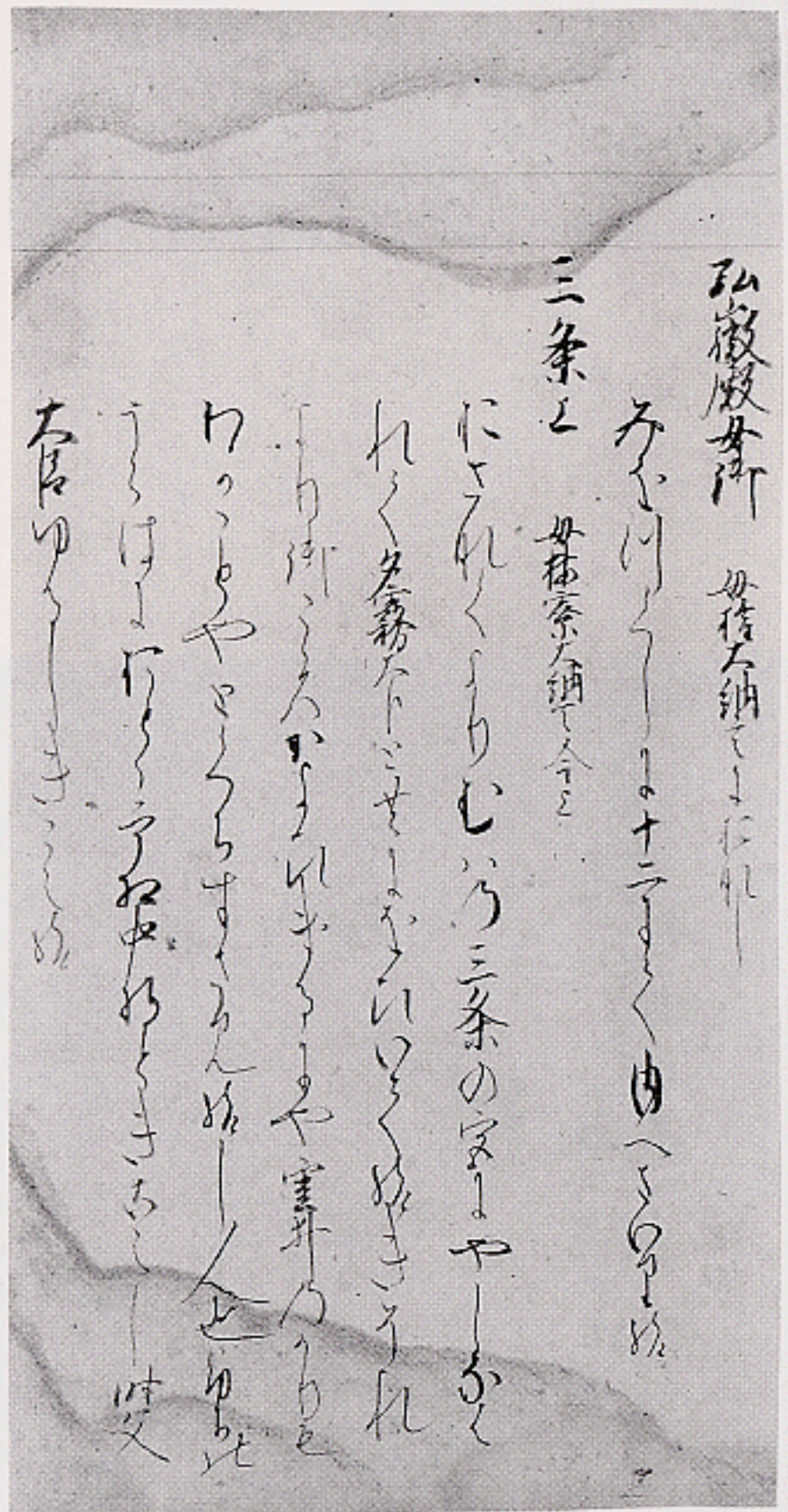
源氏物語断簡 総角卷 別本  
 (伝世尊寺行能筆)  
 82-ト



82-ヌ 源氏物語断简 夢浮橋卷  
(伝世尊寺行能筆)



82-リ 源氏物語断简 東屋卷  
河内本 (伝阿仏尼筆)



85 源氏物語系図断简 (伝冷泉為相筆)

<p>右近大将        四郎の女        このまゝ        母不詳</p>	<p>松平部親        源三位        頭中將        母前身院        外孫節言也</p>	<p>梅後        侍俊        巢守三位        母不詳        母前身院</p>	<p>美香啓宮        師宮        官御方        曲侍        母不詳        母前身院</p>
--	--	--	---

83 源氏物語系図 巢守三位本

光源氏物語系図

太上天皇

あつひの春に西位と出せり  
 くむらぬの木の春にこれ  
 行ぬ (相登の幸)

前坊

院の御けり

秋好中宮 母前身院

あつひの春に西位と出せり  
 とほくにけり  
 あつひの春に西位と出せり  
 盛とさき  
 小千代の侍

おんか

桃園部御宮

せつり

藤原院

84 光源氏物語系図



紫明抄卷第二 目録巻 生元前甲 生雲寺徳侶素方撰

三源氏物語卷三 三巻は五

しりやうりやうりやうり

痲病 五店 俗三巻

少山りやうりやうりやうり

りやうりやうりやうりやうり

りやうりやうりやうりやうり

因世は後後河所病疾し時山座し意息信ことま

老病を御りやうりやうりやうりやうり

いさうりやうりやうりやうりやうり

三巻集

たまつていけりしん業此抄すまのいさや野一のまうり

いけは源氏等為巻名まうりやうりやうりやうり

部この姓名をむしりやうりやうりやうり

まうりやうりやうりやうりやうり

まうりやうりやうりやうりやうり

まうりやうりやうりやうりやうり

まうりやうりやうりやうりやうり

まうりやうりやうりやうりやうり

まうりやうりやうりやうりやうり

まうりやうりやうりやうりやうり

まうりやうりやうりやうりやうり

88 三源一覽

牙十七 玉醫男

意やふらぶねさうむらういさうりやうりやうり

のうらうりやうりやうり

まうりやうりやうりやうり

まうりやうりやうりやうり

まうりやうりやうりやうり

まうりやうりやうりやうり

まうりやうりやうりやうり

まうりやうりやうりやうり

まうりやうりやうりやうり

まうりやうりやうりやうり

花鳥餘情第一抄

凡五十四巻の巻名は此意あり一は詞と

二は多岐より三言詞と名は此二とより言は

少いさうりやうりやうりやうり

有門二空門三亦有亦空門は非有非空門之

一切言教は言辭と名は是よりて言は言辭外別

言辭と名は是よりて言は言辭外別

言辭と名は是よりて言は言辭外別

言辭と名は是よりて言は言辭外別

言辭と名は是よりて言は言辭外別

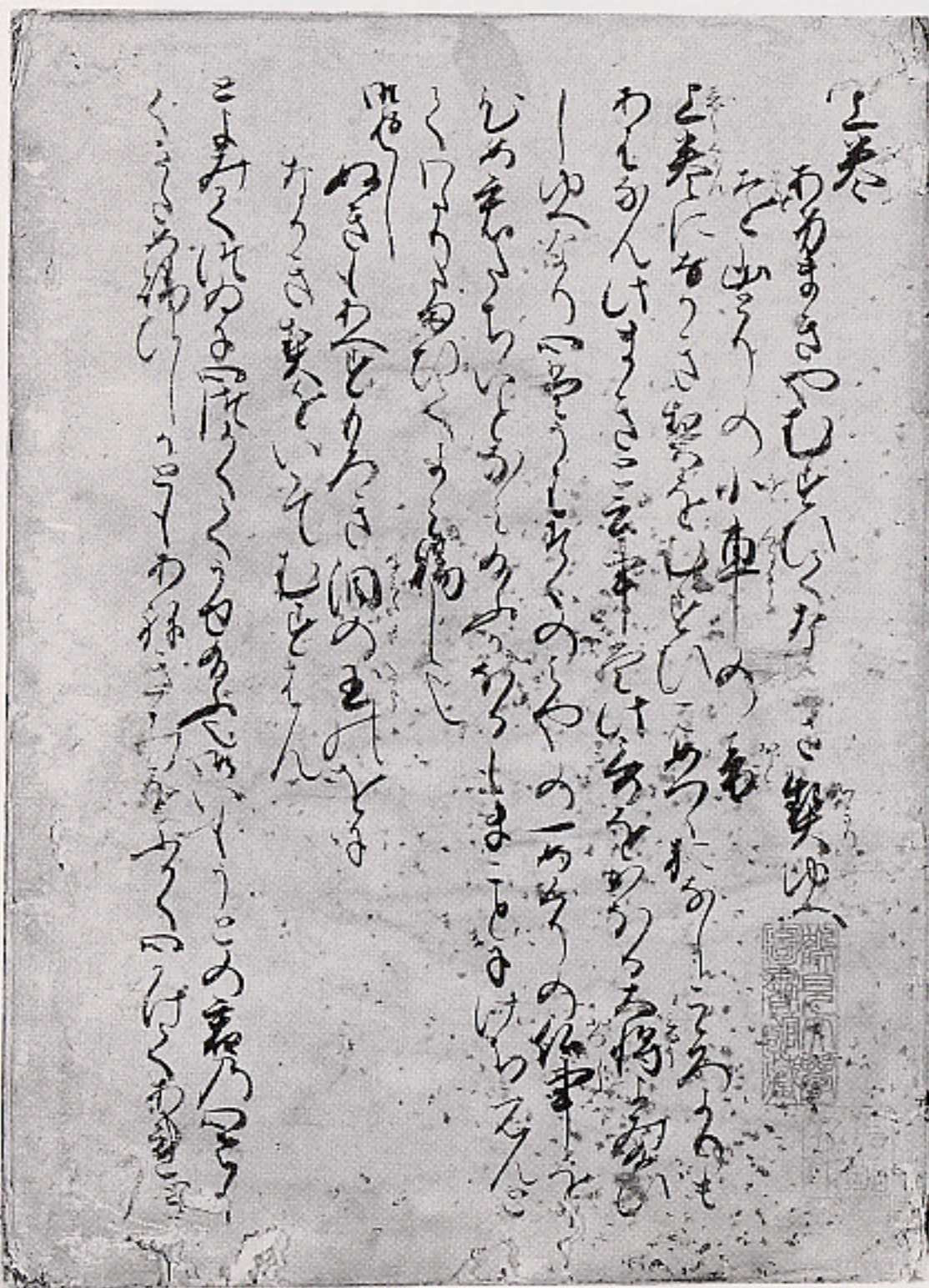
言辭と名は是よりて言は言辭外別

言辭と名は是よりて言は言辭外別

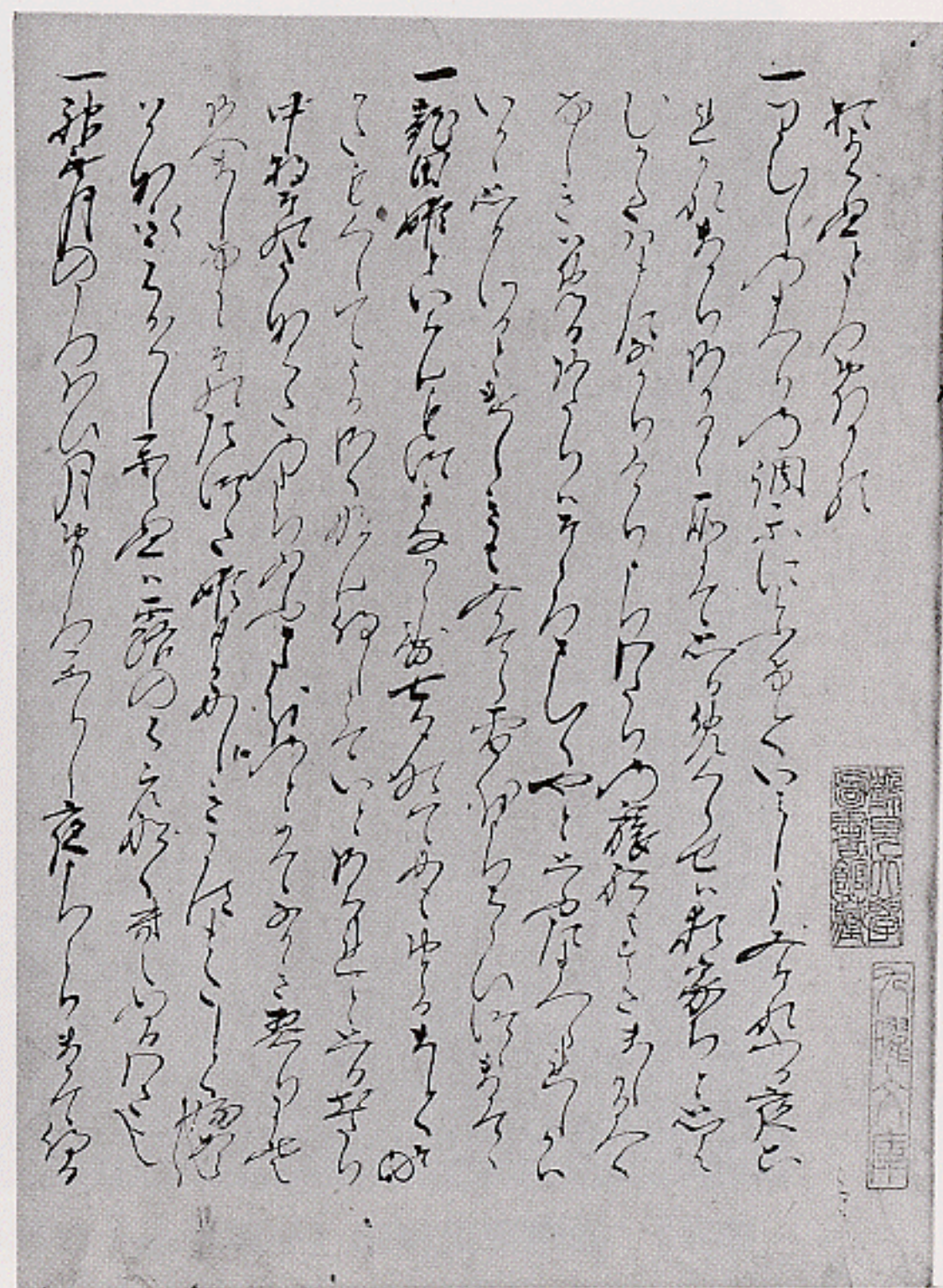
87-2 花鳥余情〔抄出〕

87-1 河海抄〔抄出〕

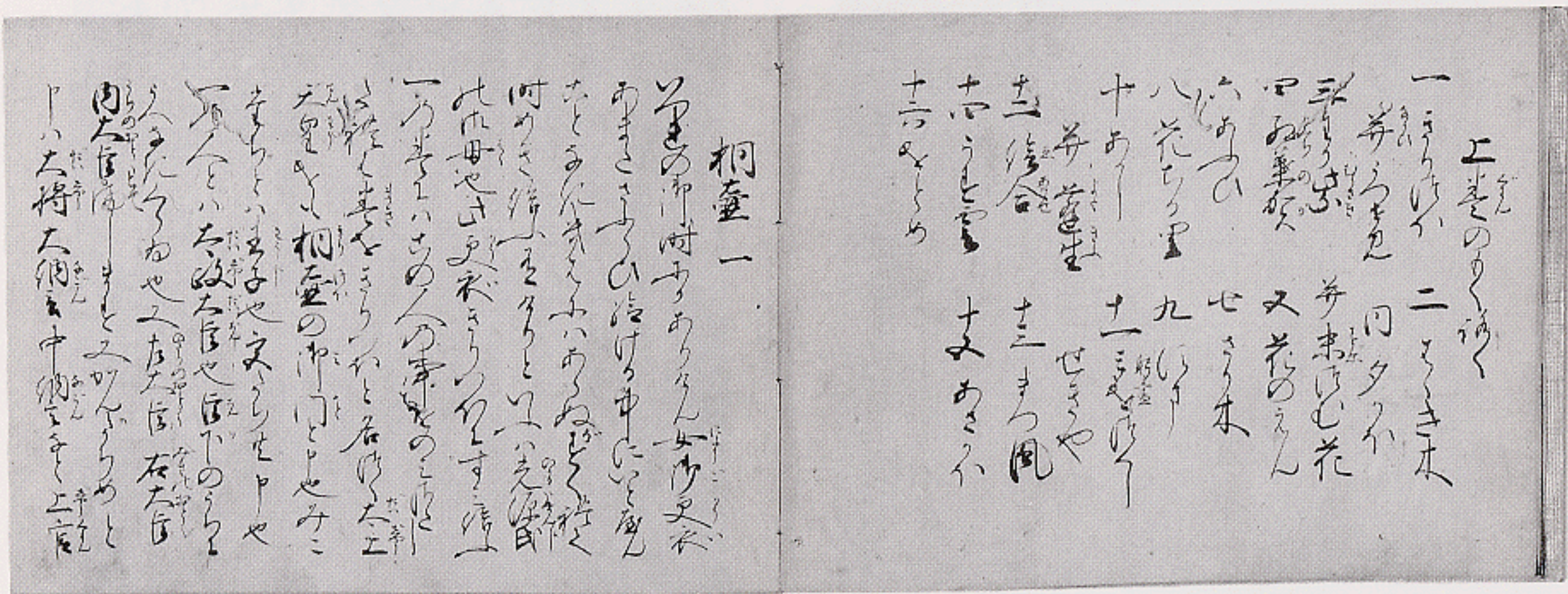




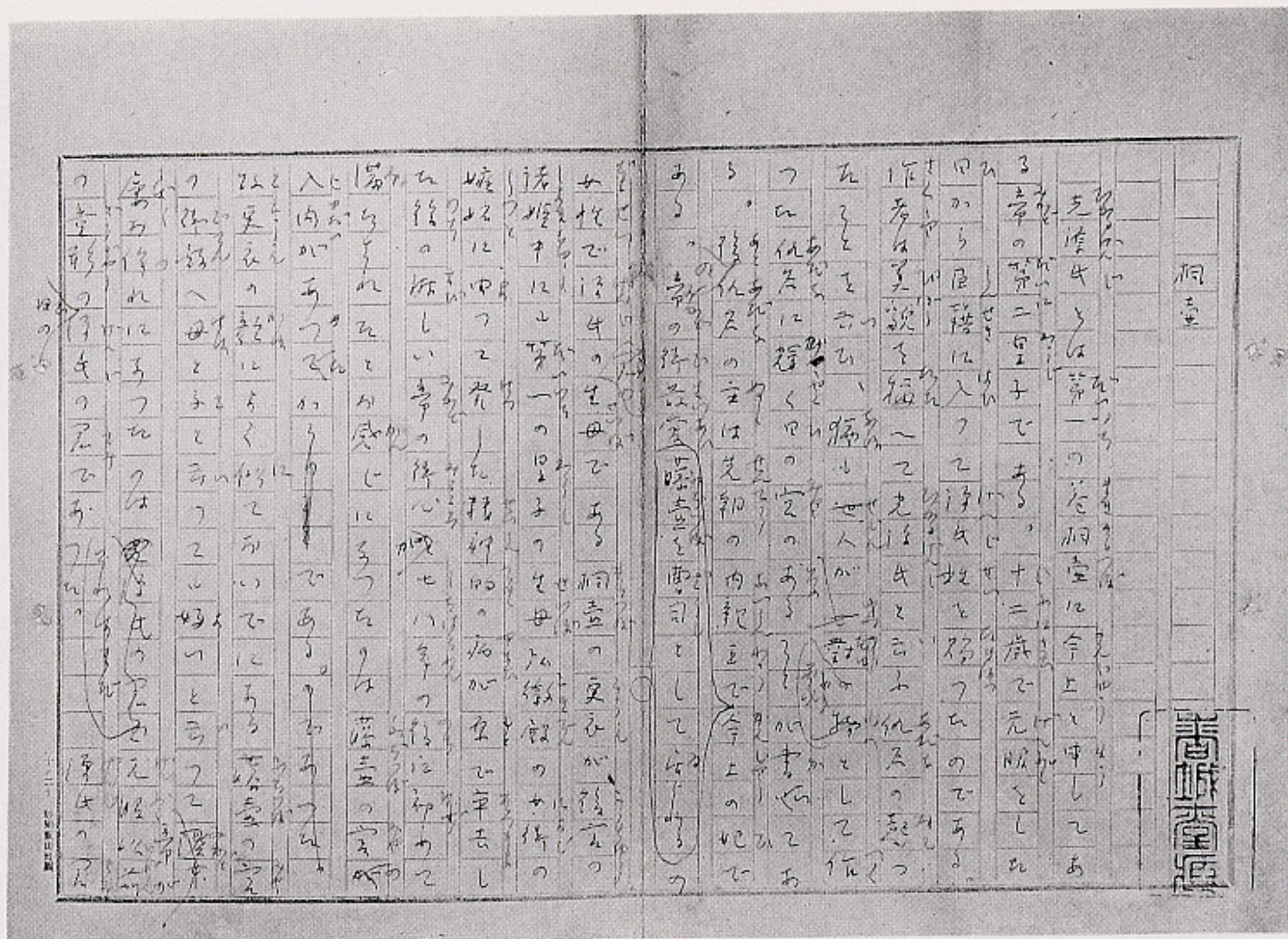
94 源概集 (源氏小鏡) (伝中院通勝筆)



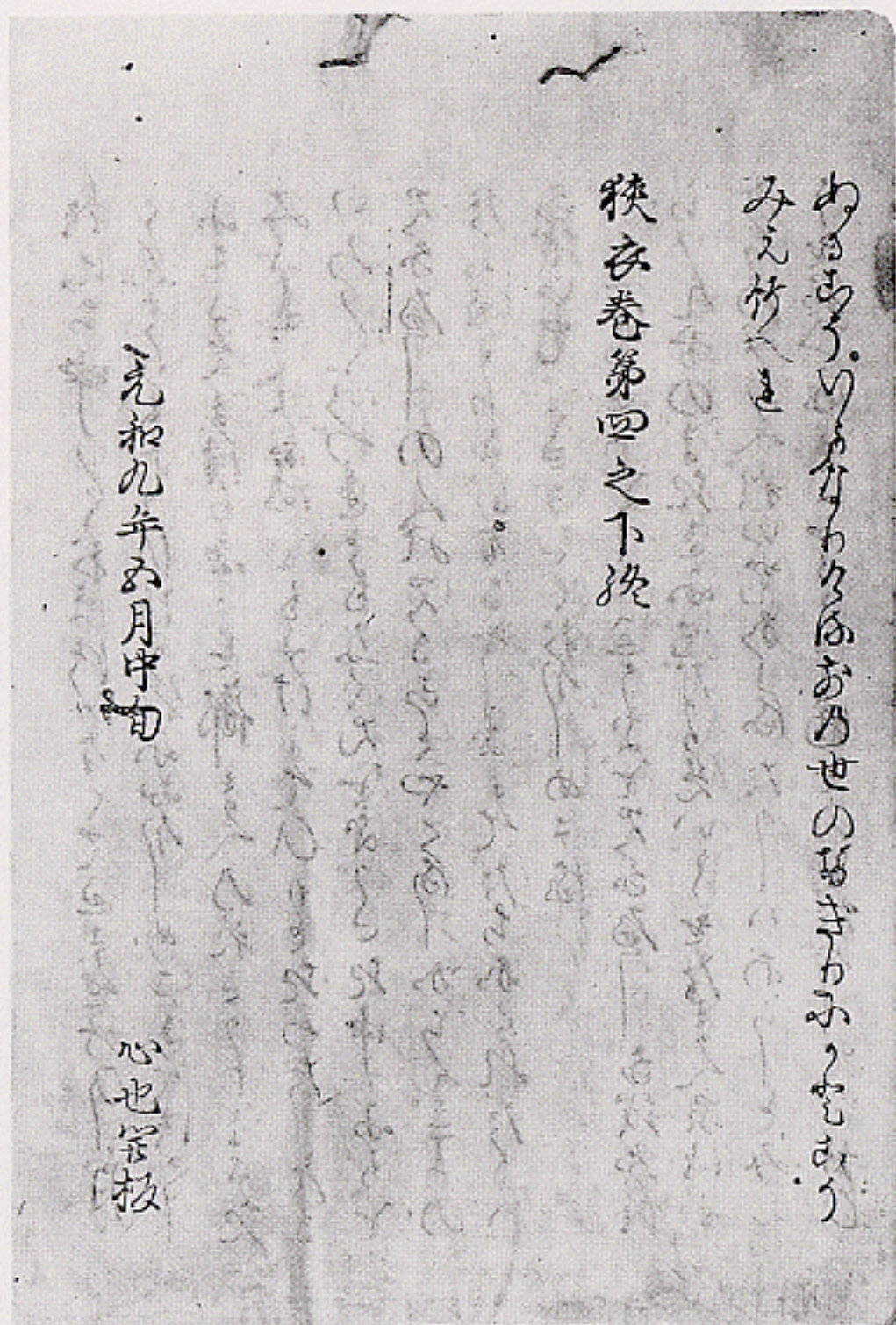
92 紫塵愚抄



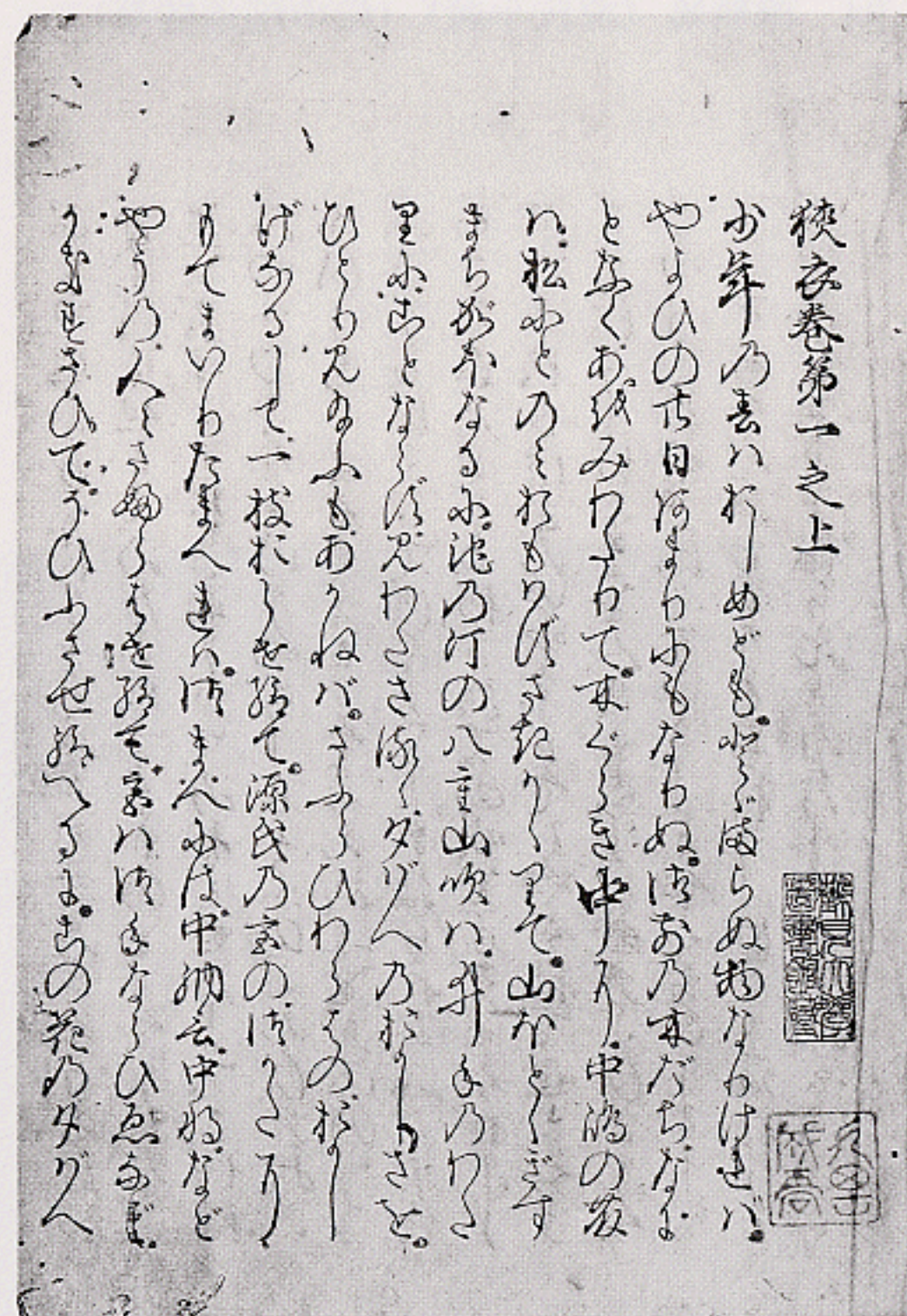
93 源氏物語拔書抄 (源氏大鏡)



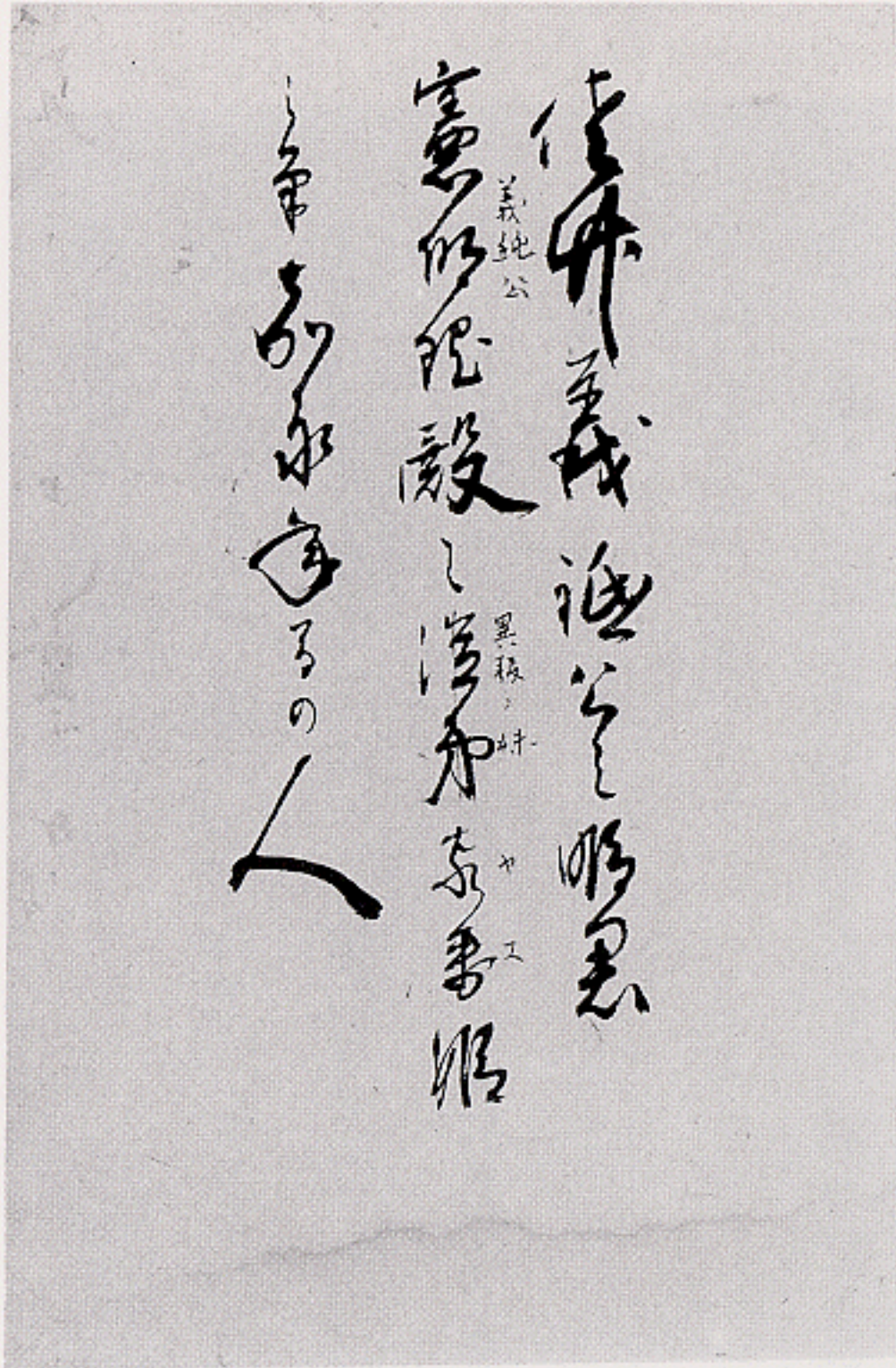
参考1 梗概源氏物語 (与謝野晶子自筆草稿)



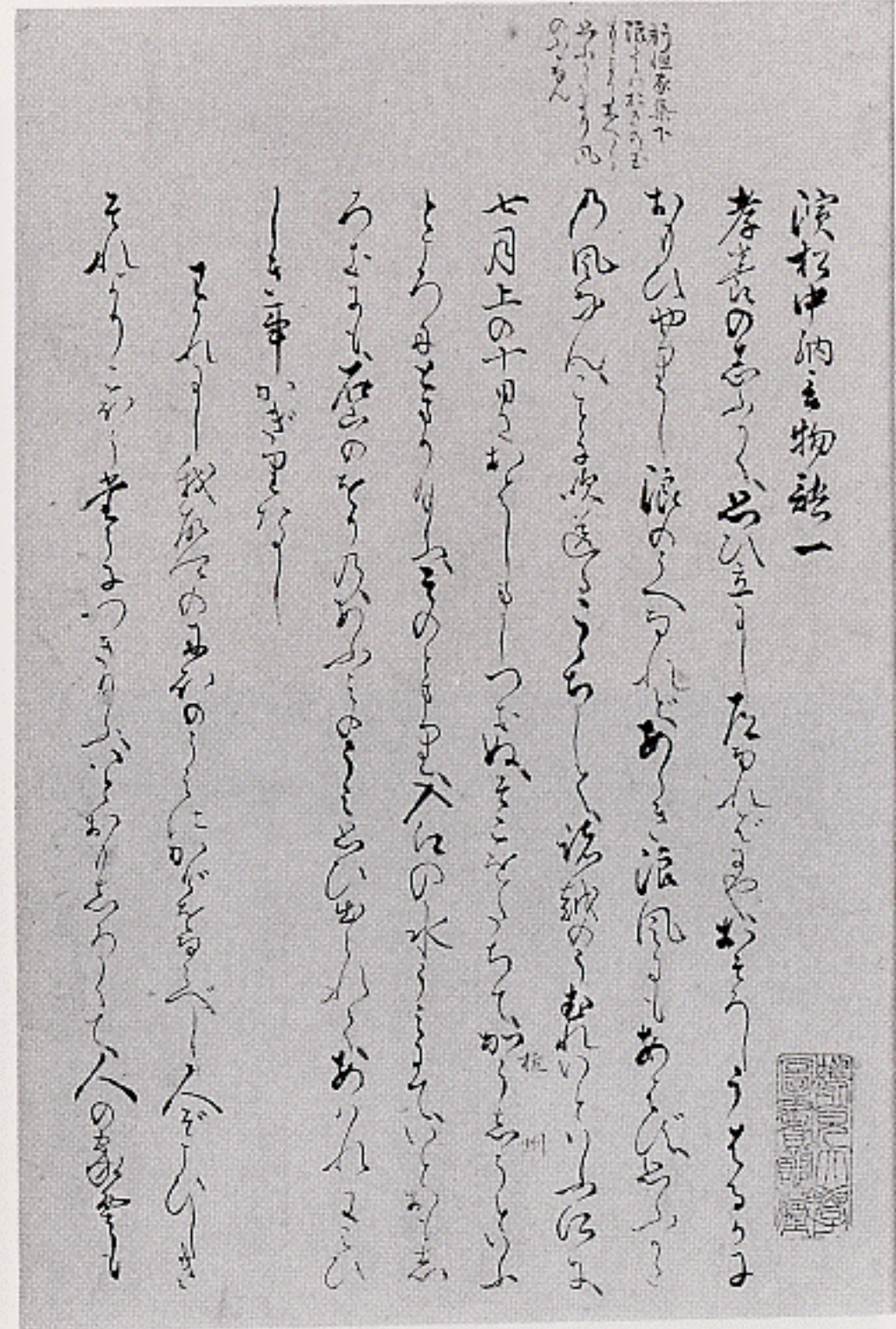
97-2 狭衣物語



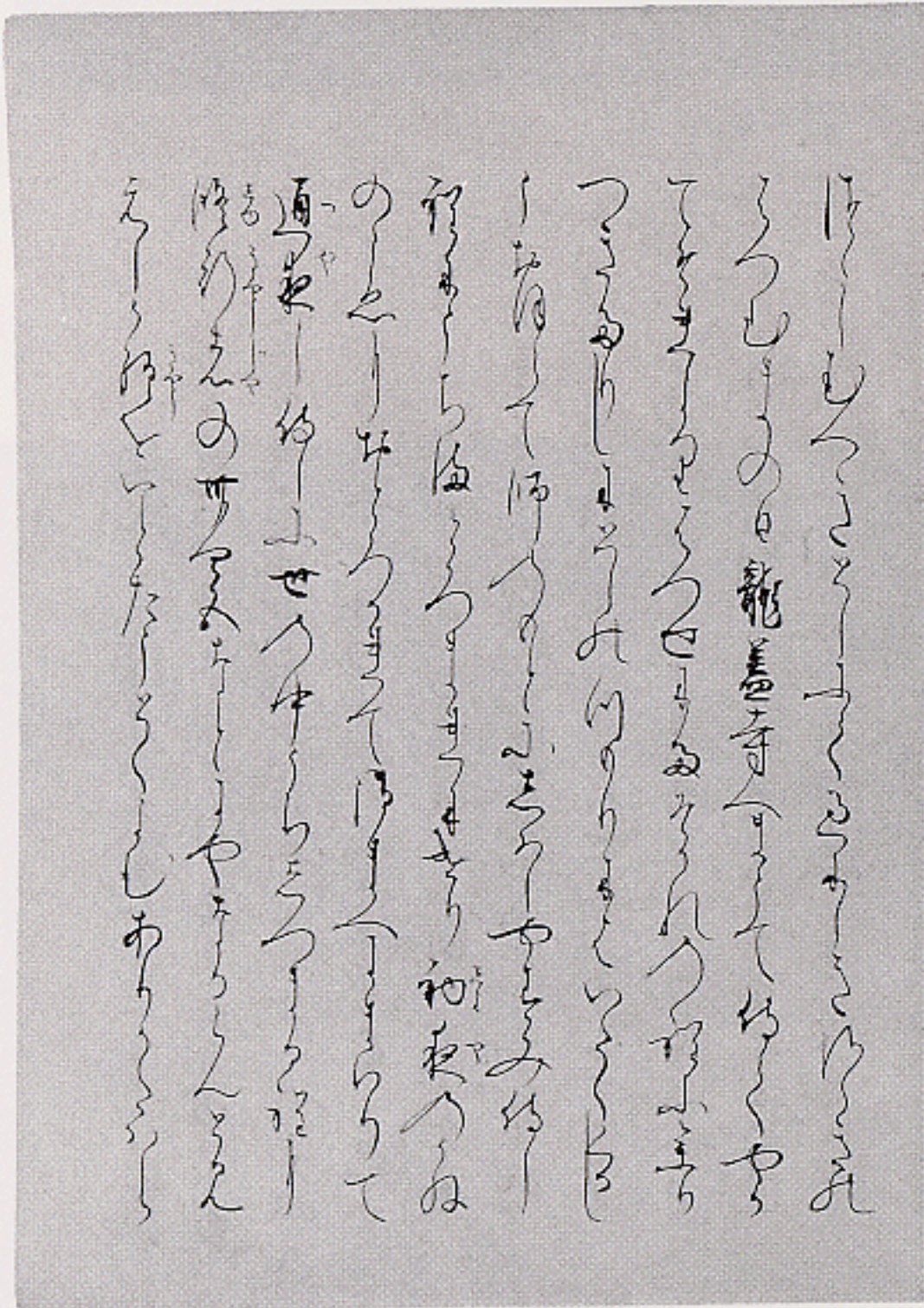
97-1 狭衣物語 古活字版



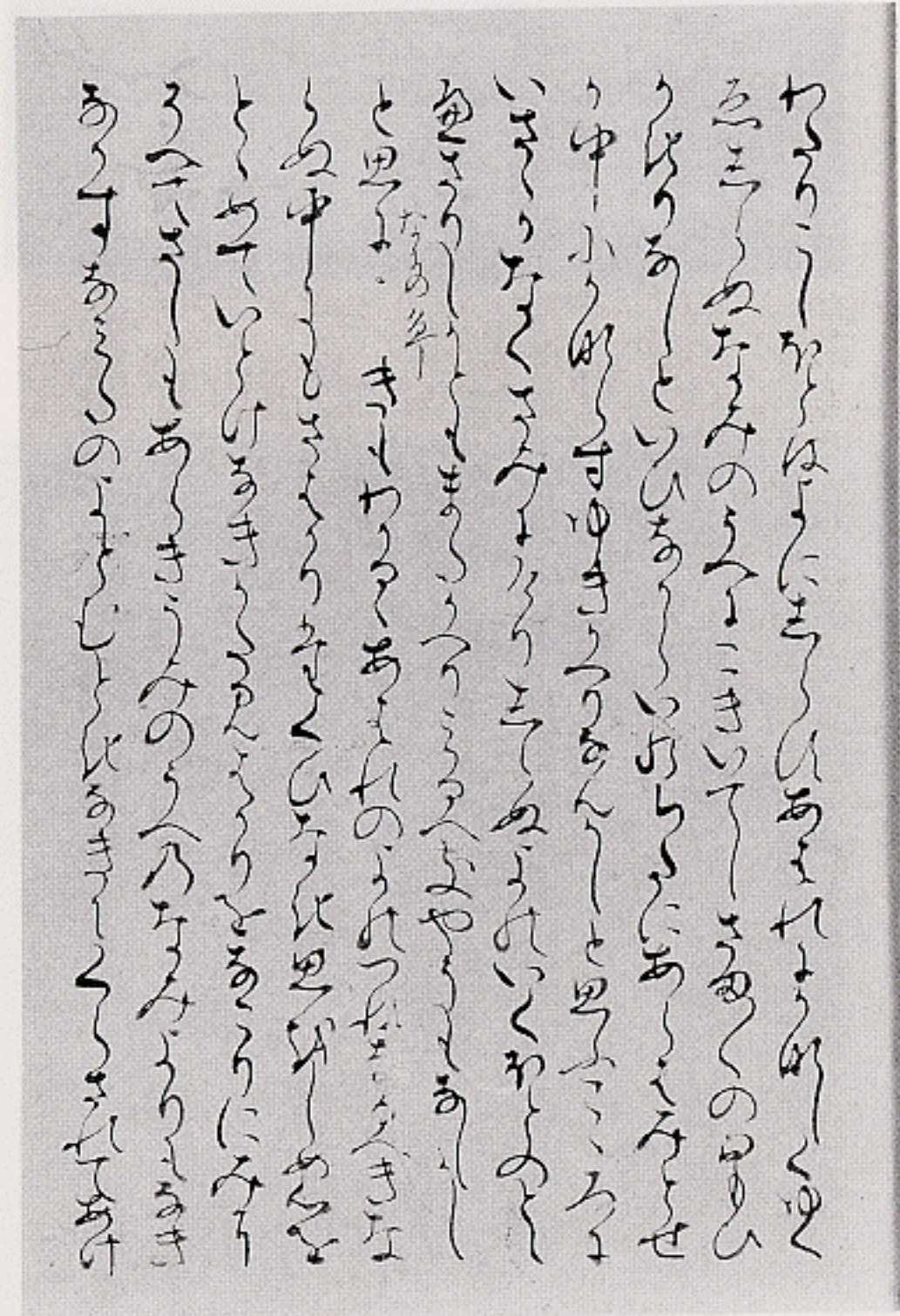
100-2 浜松中納言物語



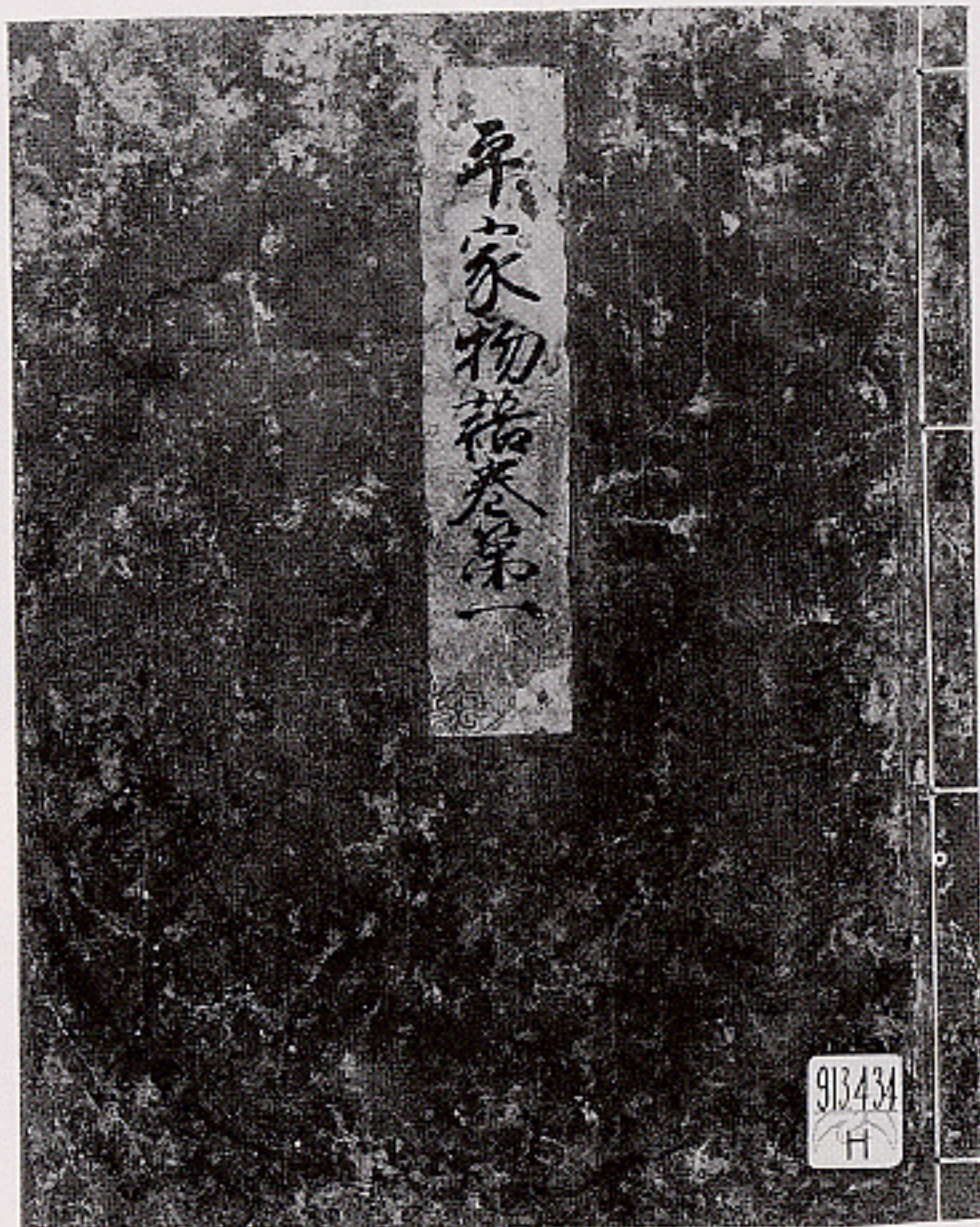
100-1 浜松中納言物語 安田躬弦書入本



104 水鏡



99 浜松中納言物語



平家物語巻第一  
 祇園精舎の鐘の暮は法苑の音をたゞ響きあり  
 空に雙樹の花をば風者必葉のふりり紙  
 のふすかゝる人久しかりきそもまゝ秋  
 の夢のゆゑに多き世若く遠くわらふの悔  
 舟風をよる唐の如くおほく異朝とてや  
 ありて春の趙高漢の王莽梁州周伊唐の  
 禍山はよひて萬の先皇并改り志はるす

105 平家物語

小原御幸  
 幾程は江里の文治二年八月の比建礼  
 門院小原の困居に御栖居に御遊ばさ  
 せ給ひて思召されとも二月には生れ程  
 迄風はひく餘り未盡奉り白鳥  
 御籠りて衣はひくも打解りて去  
 道まで北条御幸の法皇御幸とて  
 小原御幸の御幸の御幸の御幸とて  
 法皇の御幸の御幸の御幸の御幸とて  
 六人御上人八人北面の御幸の御幸  
 通に御幸の御幸の御幸の御幸とて  
 補陀樂守小野里大原又八條縁殿御幸と  
 て去りし御幸の御幸の御幸の御幸とて  
 白雲殿の御幸の御幸の御幸の御幸とて  
 指の御幸の御幸の御幸の御幸とて  
 ちの御幸の御幸の御幸の御幸とて  
 入りの御幸の御幸の御幸の御幸とて  
 御幸の御幸の御幸の御幸の御幸とて  
 御幸の御幸の御幸の御幸の御幸とて  
 一字の御幸の御幸の御幸の御幸とて  
 白雲の御幸の御幸の御幸の御幸とて  
 霧焼の御幸の御幸の御幸の御幸とて  
 白雲の御幸の御幸の御幸の御幸とて

106 平家物語抄出 大原御幸

我の心はまことにくさくさしくなりしは  
 多しをうらみしはくさくさしくなりしは  
 心はまことにくさくさしくなりしは  
 多しをうらみしはくさくさしくなりしは  
 心はまことにくさくさしくなりしは  
 多しをうらみしはくさくさしくなりしは  
 心はまことにくさくさしくなりしは  
 多しをうらみしはくさくさしくなりしは

101 栄花物語断簡 (伝藤原家隆筆)

心はまことにくさくさしくなりしは  
 多しをうらみしはくさくさしくなりしは  
 心はまことにくさくさしくなりしは  
 多しをうらみしはくさくさしくなりしは  
 心はまことにくさくさしくなりしは  
 多しをうらみしはくさくさしくなりしは  
 心はまことにくさくさしくなりしは  
 多しをうらみしはくさくさしくなりしは

102-ロ 栄花物語断簡

後の世はくさくさしくなりしは  
 多しをうらみしはくさくさしくなりしは  
 心はまことにくさくさしくなりしは  
 多しをうらみしはくさくさしくなりしは  
 心はまことにくさくさしくなりしは  
 多しをうらみしはくさくさしくなりしは  
 心はまことにくさくさしくなりしは  
 多しをうらみしはくさくさしくなりしは

102-イ 栄花物語断簡 (伝冷泉為相筆)

逃籠いあけりつゝいんま始皇帝をにじし  
とふふの切やもまわと下随き長なり  
その六思後徳下ゆいけりけり  
娘皇帝も富き下りさ敵るわけし四海  
直有下下て獲於期。首領はさるふくは

107-イ

つゝいしとよふわが候て賢く申も  
けり紙はけり下ふり第二夜に  
父もいきて見るまはたふりかひ奴原乃  
帯いられ人代志にばる消息は見え  
あ事やまじ事代志下りてつれ  
今小物候りて下りてさしあふ

107-ロ

魂は清き雲敷き鬼飛にこく平子持て  
因ゆり打音の小匙かしてあふらん  
て各々逃りて忠威北面に折節共

107-ハ

先走きつては六段りわしと馳並て引組  
馬くわとと落きわ重光も大力の如くの者  
か里をわしと七郎取取て押して領地  
十水もつりてつれつれ子も重光主の首  
敵乃馬の三付に付しては敵の首

107-ニ

れの本書に用乃山は如くつて暫く越中の  
國名にやいふ  
越中國注人平泉寺長史新の威儀師國  
人福津新介越中國に野荒河と石黒及び  
國に拜師富樫一庵寺宗今評定し  
本書は平家追討乃る越中國名に涉る

107-ホ

右家下懸おしり千野右衛門。申ける何の十  
郎にやと申し敵は極よまにやゆらさ  
細事責言下りたが候下戦の多の千野右衛  
門に懸下原十郎被誅すもの同國上言の千野  
七郎光重も兄弟昇進下戦いさる敵四  
人切殺し我力も打死しつれ先母は小

107-ヘ

かの又舞前と申し云者也桃喜の結の  
くは美若乃貝のゆやちのちを  
子國にやと被具しものちり被殺し  
崩れをまのちも平家も又社儀  
冬九高の傾城にやと者なりあむ  
らひく事しあむは使官よくを討  
てしつれ乃と平家一人のせしれ

107-ト

107 異本平家物語断簡 (伝世尊寺行俊筆)



何事をももつて美華の替青葉の  
 肩黒くくらの眼丹果け脣桃李の媚の  
 楊柳の姿繪し書とも業も及ぶく  
 く骨のけりくくくくくくくくく  
 自分くくくくくくくくくくくく

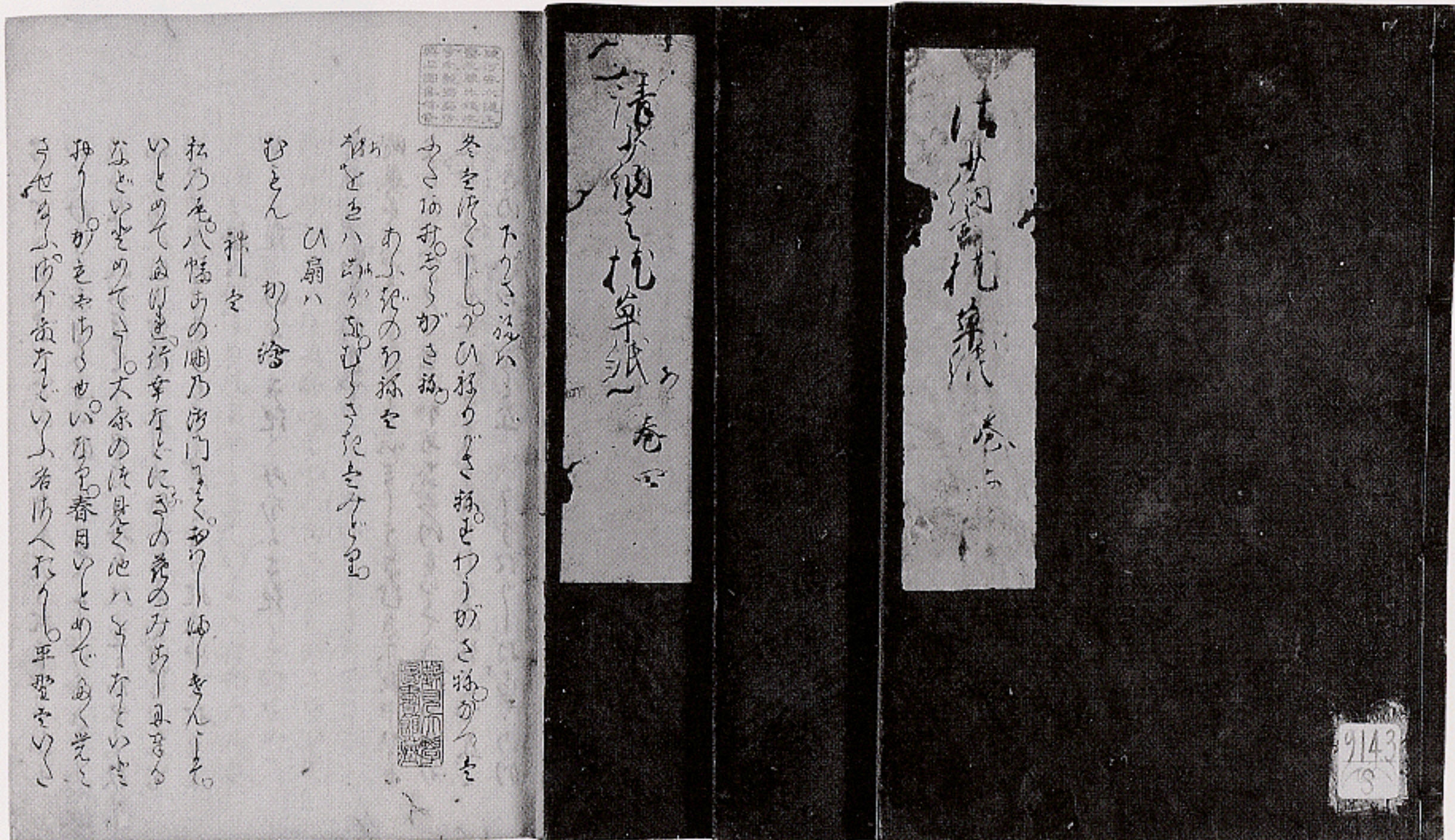
107-リ

くる特に取て乃面目くく骨の骨の其次  
 十身作國任(豆田立郎)と云者此くく村平  
 くとくくくくくくくくくくくくくく  
 骨くくくくくくくくくくくくくく  
 骨くくくくくくくくくくくくくく

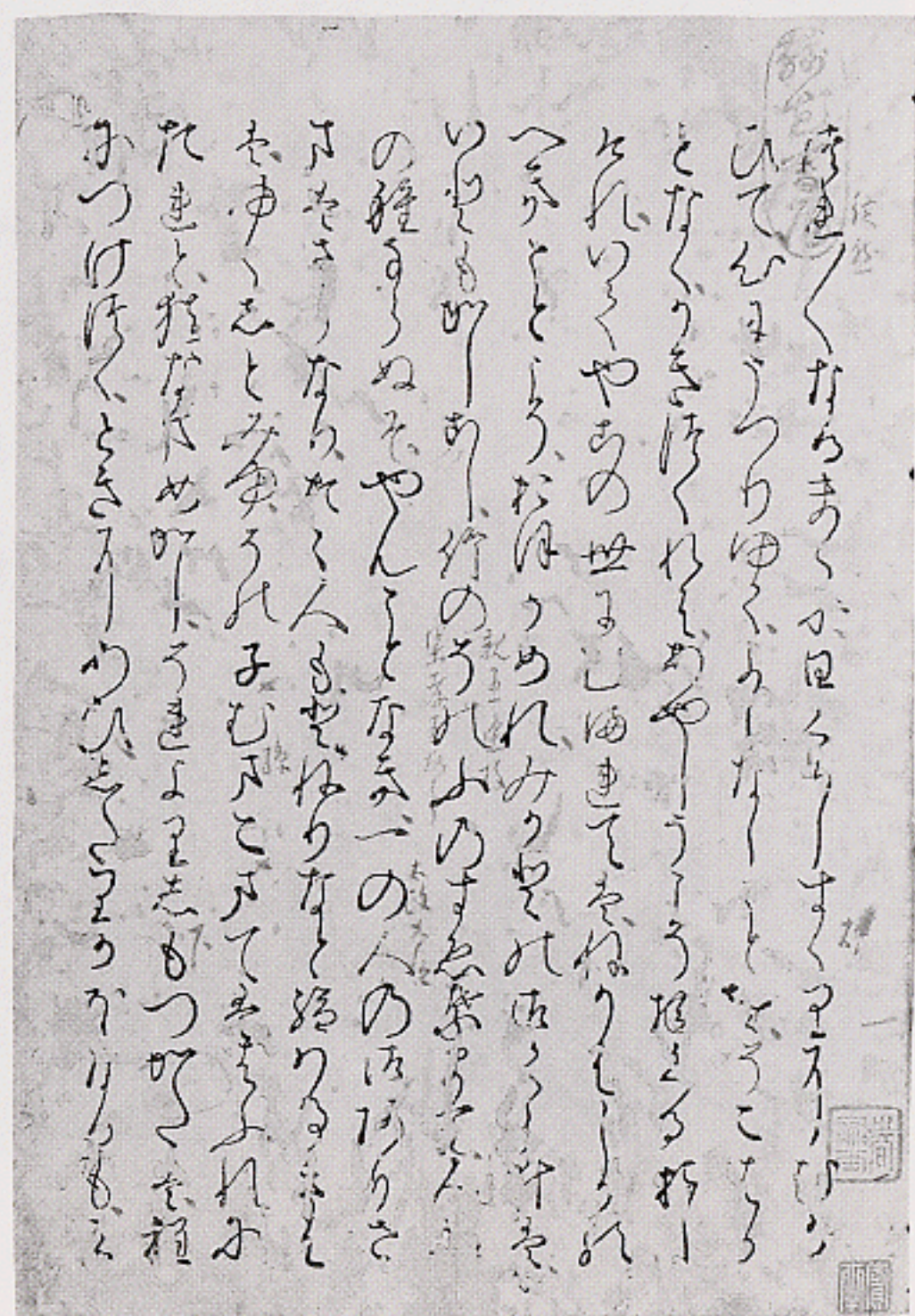
107-ヌ

亦は休やーいん中休は源平法公戦？  
 ろ情乃軍途くくくくくくくくく  
 事くくく取も乃望も願くくくの面目くく  
 休くくくあの前代着村楨ー休わらわら  
 君乃法為助宗り為世国くくくくく  
 純の法計もわ休くくくくくくく  
 道理をわくくく省くくくくくく  
 版も志くくく音くくくくくくく

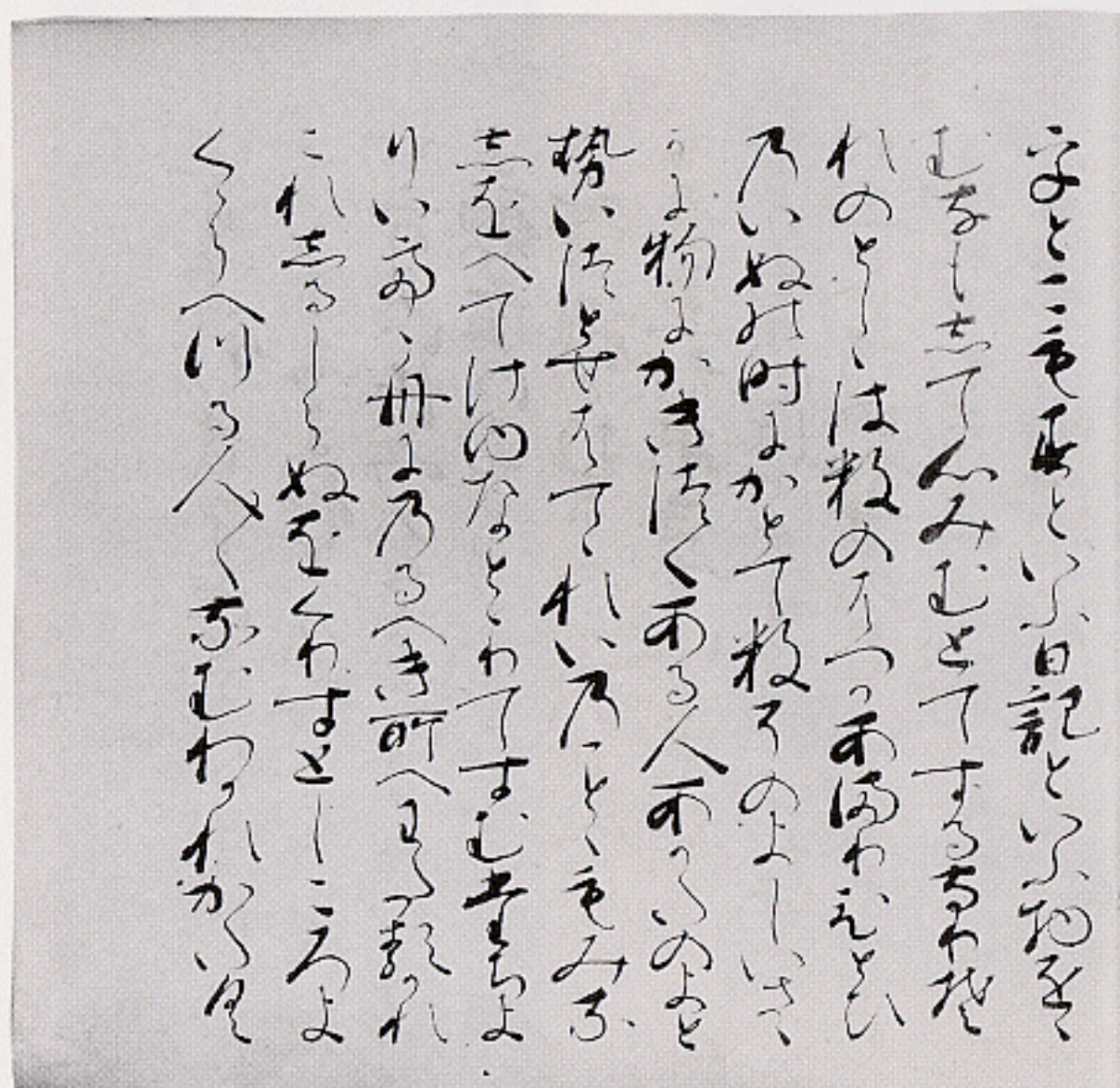
107-チ



111 枕草子 古活字版

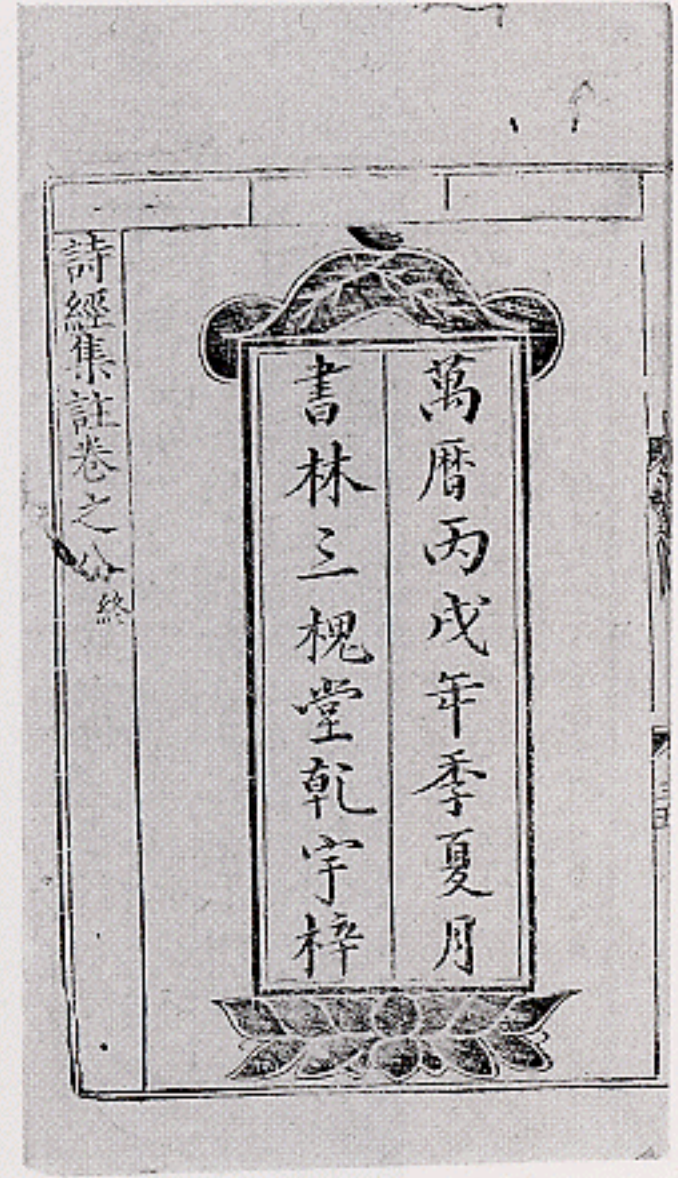


112 徒然草 卷上 古活字版



113 土佐日記 藤原定家筆臨模本 (伝冷泉為広筆)





三槐堂王乾字繡梓

烏臺正譌

圖點明悉一字無差

凌雲詩經

詩經集註序

或有問於予曰詩何為而作也予應之曰人生而靜天之性也感於物而動性之欲也夫既有欲矣則不能無思既有思矣則不能無言既有言矣則言之所不能盡而發於咨嗟咏歎之餘者必有自然之音響節族而不可已焉此詩之所以作也曰然則其所以教者何也曰詩者人心之感物而形於言之餘也心之所感有邪正故言之所形有是非惟

121 烏台正譌凌雲詩經 (詩集伝) 明版

皇明歷科

傳世輝珍

怡慶堂余秀峰梓

詩經墨卷

刻詩經傳世輝珍墨卷序  
夫經者常也非常是不經也故崇雅黜浮為強馳怪駭詭為不經強不經上閔國運之盛衰下係士風之醇薄是以文尚

萬曆丁酉歲孟冬  
書林怡慶堂梓行

翰林評選皇明歷科鄉會詩經墨卷三頌回卷

122 翰林評選皇明歷科鄉會墨卷 明版

子然後浩然有歸志魯平公駕將見孟子嬖  
 人臧倉謂曰何哉君所謂輕身以先於匹夫  
 者以為賢乎樂正子曰克告於君君將為來  
 見也嬖人有臧倉者沮君君是以不果曰行  
 或使之止或尼之行止非人之所能也吾不  
 遇於魯侯天也臧氏之子焉能使予不遇哉  
 又絕糧於鄒薛困殆甚退與萬章之徒序詩  
 書仲尼之意作書中外十一篇以為聖王不  
 作諸侯恣行處士橫議楊朱墨翟之言盈於  
 天下天下之言不歸楊則歸墨楊氏為我是  
 無君也墨氏兼愛是無父也無父無君是禽  
 獸也楊墨之道不息孔子之道不著是邪說  
 誣民充塞仁義也仁義充塞則率獸食人人  
 將相食也吾為此懼開先王之道距楊墨放  
 淫辭正人心熄邪說以承三聖者予豈好辯  
 哉予不得已也梁惠王復聘請之以為上卿  
 孫况齊威宣王之時聚天下賢士於稷下尊  
 寵若鄒衍田駢淳于髡之屬甚眾號曰列大

風俗通七

120 風俗通殘簡 元版

文選卷第一

梁昭明太子撰

五臣并李善注

賦甲善曰賦甲者舊題甲乙所以紀卷先後今  
卷既改故甲乙並除存其首題以明舊式

京都上

班孟堅兩都賦二首善曰自光武至和帝都洛陽  
西京父老有怨班固恐帝去

洛陽故上此詞以  
諫和帝大悅也

兩都賦序

班孟堅善曰漢書云班固字孟堅扶風安陵人九  
歲能屬文至明帝時為蘭臺令史遷為郎  
後實憲出征匈奴以固為中護軍憲廢坐  
免官憲獄中明帝脩洛陽西上父老怨帝

哉善曰賦悲也善曰德惟微漢書  
曰鑿陶上號曰唱爾長懷中篇而歎

文選卷第六十 終

右文選板歲久澆滅殆甚紹興二十八年冬十月

直閣趙公來鎮是邦下車之初以儒雅飾吏事首加

修正字畫為之一新俾學者開卷免營魚三豕之訛

且欲垂斯文於無窮云右迪功郎明州司法參軍兼

監盧欽謹書

慶長丁未沽洗上旬八真

板行畢

123-2 文選

123-1 文選 古活字版

白氏長慶集序

浙東觀察使元稹徵述

白氏長慶集者太原人白居易之所作居易字樂天樂天始言試指之無二字能不誤與子書始既言讀書勤敏與他兒異五六歲識聲韻十五志詩賦二十七舉進士貞元末進士尚馳競不尚文就中六籍猶復落禮部侍郎高郢始用經義為進退樂天一舉擢上第明年拔萃中科由是性習相進速求玄珠斬白蛇等賦及百道判新進士競相傳於京師會憲宗皇帝冊召天下

白氏長慶集卷第一諷諭一凡六十五首

皇帝嗣寶曆元和三年冬自冬及春暮不雨旱熯上上心念下民懼歲成災凶遂下罪已詔殷勤制萬邦帝曰予一人繼天承祖宗憂勤不遑寧夙夜心忡忡元年誅劉關一舉靖巴邛二年戮李錡不戰安江東顧惟眇眇德遽有魏七功或者天降沴無乃微予躬上思蒼天滅不思致時邕莫如率其身慈和與儉恭乃命罷進獻乃命賑饑窮宥死降五刑責已寬三農宮女出宣徽廐馬減飛龍庶政靡不舉皆出自宸衷奔騰道路人僂僂田野翁歡呼相告報感泣涕沾育順人七心悅先天七意從詔下纒七日和氣生冲融凝為悠白雲散作習習風晝夜三日雨凄七復濛七萬心春熙

雲擁神龍紫氣溫重、金碧給孤園天開菴畫

山川麗春入陶鈞草木繁桃萼蒸霞紅世界柳

花吹雪白乾坤東風獨立供雙眼杜宇聲中日

向昏

南禪

質中

天府人

号大建

125 大慈寺八景詩歌斷簡 (伝二条良基筆)

124 白氏長慶集 明銅活字版

# 図録解説

## 1 〔五合書籍目録〕 平安時代末期写

卷子 一軸

継紙一軸。紙高二七・二種。本文料紙、楮紙。巻初を欠く佚名の書籍目録であるが、端裏書に「法花經疏 顯章疏 二合目六<sup>(抹消)</sup> 俱舍 傳記 講式 五合目六」と分類が記される。最初、法花經疏(九部)・顯章疏(十二部)の二合(「合」は書櫃の単位であるが、ここでは分類名を指すか)の目録にとどめるつもりを、紙幅を継ぎ、俱舍論(六部)・傳記<sup>(仏法)</sup>(二部)・講式(十二部)を加えて五合六一部の目録としたのであるが、巻尾をも欠き、本来は更に続いたかも知れない。まず分類名に合点を打ち、各自、書名・巻帖数その他を注記するが、法花經疏に撰者名等の注記を若干見るのは注意される。「法花經釋文三帖<sup>上中下</sup> 中算撰/法花音訓一卷<sup>慈恩</sup>/法花經音義<sup>匡房作</sup>」とあるのがそれで、中算(仲算)は平安中期の、観音の応化とも伝えられる法相宗の学僧で、『法花經釋文』は著作の一つとして醍醐寺蔵古鈔本三卷(重文)などが知られる。また慈恩とは、中国法相宗の開基たる窺基(単に基というが正しい)で、玄奘に師事して、百の疏主と呼ばれるほど多くの著述を残し、『法花音訓』はその一つである。一方、大江匡房は権中納言に至った平安後期の著名な漢学者で、仏籍に通じていたことも知られているが、数ある法花經音義なる書の中に、匡房の撰者名を見いだすこ

とはできない。結局、法花經疏の場合では、書名の肩に嘉祥や天親など唐代僧侶の名を記すので、彼等の經疏類が混在した目録である。目録編者は誰と知られないが、「俱舍論本頌」に「有注 先師御注也」とあるのを見るので、これに加注した者を師とした人物であろう。書名の下に「書」「摺」と注記して、写本か刊本(宋版なるべし)か区別したり、「唐書」と唐代古鈔本であることを示しているのも興味深い。しかし各合の中で最も注目されるのは、「傳記<sup>(仏法)</sup>」に見える諸書であろう。まず「扶桑略記抄三卷」とあるが、『扶桑略記』三〇卷は嘉保元年(一〇九四)以降の堀河朝、叡山の僧皇円の撰と推定されるので、三卷より成るといふ抄本の成立は、それを更に下らなければならぬ。しかし天理図書館所蔵の同名の書が、零本ながら平安朝末期の書写であるの思い、この抄本が『水鏡』三卷の成立に何らかの関与をしたかと考えると、やはり一二世紀半ばには作られたのであろう。また「釋氏蒙求一帖<sup>複上中下</sup>」とある書名は、宋史芸文志には程謙撰とあり、続藏經所載本には釋靈操撰とあって、いずれとも決しがたいが、「通憲入道藏書目録」第廿七櫃に「釋氏注蒙求一帖」と著録されている。通憲目録成立年代に疑問なしとしないが、先師太田品二郎の指摘のごとく、なお院政期における書籍目録とするのを妨げない。その他、傳記の合には、「日本靈異記一部二帖<sup>上中下</sup>/日本感靈錄一部二帖<sup>上下</sup>」と往時の体裁をさながら伝える記事や、「一結四卷」「一結十卷」のような表示は通憲目録にも見られる)とある中に「宋朝往反消息等一通 寂昭往反消息一通 良史書札一通 玄奘歷見國一通」と細目までが記されている。「御堂関白記」寛弘二年(一〇〇五)十二月十五日の記事に「入唐ノ寂照上人ノ書持チ来ル、憐ムベシ」、長和二年(一〇一

三)九月十四日の条には「入唐ノ寂昭ノ弟子念救、入京ノ後初メテ来ル。摺本ノ文集并ビ二天台山ノ図等ヲ志ム<sup>おき</sup>」などと見えるのが想起される。「小右記目録」長保五年(一〇〇三)六月十八日の項「寂照入唐ノ首途ヲ為ス事」とある尻書きに「許サレズシテ入唐ノ事」と注記されているのと併せ考えると、その往復書簡は感慨に満ちたものであつたらう。また「大唐三蔵取經記一部三帖/感通賦一帖/清涼傳一卷/三寶繪一部三卷」とある書目にも興味をそそられる。さてこの目録の書写成立年次がいつか、たとえ、あるいは鎌倉時代初頭の書写にせよ、その王朝風へのびやかな筆法は、深い魅力を湛えていると言えよう。なお、この目録の存在については、牧野和夫が既に言及(雑誌『春秋』一九九一・六、和漢比較文学叢書14『説話文学』所収論考)し、講式の合など一部を翻印している。(池田)

## 2 本朝書策目録 江戸時代初期写

卷子 一軸

我国最古の国書の伝存書目。別称「本朝書籍目録」「本朝書目」「日本書籍総目録」「仁和寺書籍目録」「御室書籍目録」など。編者滋野井実冬という説もあるが未詳。成立は、和田英松「本朝書籍目録考證」によると、通行本の奥書から推して、永仁二年(一一二九)以前、弘安末、正応の始の頃の数年間とし、康安(南北朝)や永享・永正(室町)の成立を否とする。表紙、椽色紙表紙。紙高三一・四種。本文料紙、薄様斐紙、一二紙を継ぐ。外題なく、内題「本朝書策目録」。編目は神道、帝紀、公事、政要、氏族、地理、類聚、字類、詩家、雜抄、和漢、管弦、医書、陰陽、人之伝、官位、雜々、雜鈔、仮名の合計一九。

収載書目は四四八部。仮名篇は最初の一紙（一四部収載）のみで大部分を欠き、伝本系統を明らかにする奥書も逸しているが、永仁（永正と誤記する伝本もある）奥書本に類似する。内容は書名と巻数のみを掲げて原姿に近く、その原本は透き写しの書体から判断して鎌倉末期に遡る。宝玲文庫旧蔵。なお、本学はこの他に池田亀鑑旧蔵の三本を含め同書の写本五本と寛文刊本を所蔵する。（吉田）

### 3 大般若経 天平時代写

（永恩加点識語） 卷子 五軸

写経五軸。卷一七六一一八〇。紙高二五・三糎。本文料紙、黄麻紙。この写経は、永恩具経と呼ばれているように、奈良興福寺の蔵司であった永恩が、鎌倉時代前期の貞永・天福（一一三二―一一三三）前後、かねて諸処より蒐集していた天平書写大般若経六〇〇巻に、全巻にわたって朱の句点を施し、一具として自分の氏神である河内国玉祖神社に奉納したものの一部である。その後、神仏分離に際して蘭光寺竹之坊に引き取られたことなど、田中塊堂著『古写経綜覧』に詳しい。

卷子本を一時折本に改装した形跡を見るが、現在は再び本来の原装風な卷子本に戻されている。近代の再改装にかかるものであろう。同じ永恩具経の中には、天平の書写奥書を残す巻々があり、最近（平五・十一）発行の『一誠堂創業九十周年記念即売会目録』筆頭にある卷第十八には「天平十二年歳次（七四一）辛巳七月十八日奉為四恩 写檀越／下村主廣麻呂」と見える。本学所蔵の五軸すべてにも朱の句点があり、卷一七六より一七九までには卷末に朱で「句切了永恩」と記されるのみであるが、卷一八〇

には同じく朱書で、

天福元年癸巳五月廿六日興福寺上借馬道以東  
為第二房句切了 永恩生年六十七

とある。こうした加点奥書は一〇巻ごとに記すのを原則としたらしいが、蘭光寺にあった卷五九一には「貞永二年癸巳於興福寺上借句切了永恩年六十七云々」との朱書があったという。貞永二年は四月十五日に天福と改元されているので、永恩の加点が巻序に従って施されたのでないことを知る。現在、永恩具経は各地に四〇巻ほどが遺存すると確認されるが、天平経特有の雄渾にして秀麗な書法は見事であり、特に五巻が並び揃っているのは極めて貴重である。横浜市指定文化財。（池田）

### 4 〔律抄〕断簡 平安時代中期写

軸装 一幅

楮紙。縦二六・七、横五六・六糎。前後欠のため書名や奥書を欠き、その来歴なども明らかでない。ただ「篇聚釈名章第三」の下方に「愛宕神社」朱印があるので、愛宕神社旧蔵であったことがわかる。内容は墨無徳（法蔵）部の「四分律」、摩訶僧祇（大衆）部の「摩訶僧祇律」、弥婆塞（化地）部の「五分律」、迦葉遺（飲光）部の「解脱戒経」などに対する中国における漢訳の実情——時期・訳者・訳場など——について述べているが、前欠の部分に薩婆多（説一切有）部の「十誦律」がとりあげられていたことは云うまでもない。また「篇聚釈名章」では比丘・比丘尼の具足戒を、罪の種類と軽重により、五科七類に類別した五篇七聚をあげ、これについて解釈しているが、五篇の第一で教団から追放される重罪「波羅夷」の途中で終わっている。

その料紙や書体から平安中期の写本であることは間違いないが、あるいは南都における戒律研究の稀観資料かも知れない。（納富）

### 5-イ 〔第三重口決〕 鎌倉時代初期写

卷子 一軸

本文料紙、斐紙。紙高一八・二糎。東寺旧蔵。表紙を欠くが端裏書「保延記」と内容・奥書から、保延六年（一一四〇）三月十三日、定海があらわした第三重口決であることがわかる。早稲田大学図書館本（江戸時代写、「安祥寺流通用字輪観口訣」に合綴）と照合した場合、訓点などわずかに出入りが認められるが、その料紙や書体などから鎌倉時代初期の転写本と思われる。

定海（一〇七五―一一四九）は右大臣源頭房の子で、醍醐三寶院流の祖。醍醐寺座主・東大寺別当に補せられたが、天承元年（一一三二）護持僧となり、鳥羽上皇・崇徳天皇の病氣平癒をはじめ、しばしば効験をあらわしている。また定海は本書のほかに「最秘口決」や「醍醐灌頂」をあらわしている。なお早稲田大学図書館本には尾に成賢 道教 親快 親玄 澄禅 賢爾 玄海の「相承次第」がある。（納富）

（奥書）

保延六年三月十三日記之

定海

### 5-ロ 〔大次第口決〕 建暦元年写

卷子 一軸

本文料紙、斐紙。紙高一八・三糎。東寺旧蔵。仁



海(九五五—一〇四六)の口決を成尊(一〇二—一一〇七四)が記したもので、建暦元年(一一二二)三月二日、室生寺住の某が書写した旨の奥書があり、端裏書に「大次第口決」とある。

意生金剛など金剛界理趣会一七尊・を掲出し注釈しているから、「理趣会」や「理趣経法」に関するものと思われるが、「義述」を引文し注釈している。

(納富)

(奥書)

建暦元年三月二日書之

室生山寺住

右御正教之中不懸思檢出了

小野僧正御房同僧都御房御

口御記也此 内可入之者也

秘藏之外無他事

金剛佛子元初七十九通五十九

應永十一年甲申卯月廿九日酉尅於

六一山閑寂臺被見尅也 (花押)

5-ハ 光明真言口伝 弘長四年写 (盛深筆)

卷子 一軸

本文料紙、斐楮混漉。紙高一七・八糎。東寺旧蔵。表紙を欠き正確な書名は明らかでないが、奥書から醍醐寺座主・東寺長者実賢(一一八〇—一二四九)の口受を、弘長四年(一一六四)二月八日、高野山尺迦院南房において盛深が書写したものであることがわかる。端裏書に「光明真言口伝実一」とあるが、「光明真言口伝」「光明真言法曼荼羅」「光明真言法護摩」からなる。

光明真言の機能について『不空羂索経』は、十悪五逆の重罪を犯したものであるも、光明真言で加持した土沙をその屍や墓の上にかけてると、罪障を除滅し無上菩提を得るとするが、白河院・美福門院・後白河院・鳥羽院・一条院妃・建春門女院の中陰にあたり、その得脱をねがい勝覚・源運・勝憲・実範・義範・勝憲によって修せられたことがわかる。

(奥書)

本云

承久二年庚辰正月廿五日

私師云

比書ハ醍醐座主東寺一長者

前大僧正御房實賢御口受

也最秘々々努々

弘長四年甲子二月八日於高野

山尺迦院南房寫書了

求法沙門盛深

6 仏果圓悟禪師碧巖録 五山版

室町時代初期刊 袋綴 五冊

宋・雪竇重顕(九八〇—一〇五二)頌古、圓悟克勤(一〇六三—一一三五)評唱。表紙は藍色紙で江戸時代の改装。外題なし。縦二六・一、横一五・三糎。左右双辺。郭内、縦一七・九、横一一・四糎。有界一一行、二一字詰。句点附刻。巻首は「仏果圓悟禪師碧巖録」、版心は「碧巖(巻数)(丁数)」とある。巻五末に長文の刊語、巻七・九・十末に「嶋中張氏書隠刻梓」、巻九末に「正琳刻梓」などの原木記を存し、さらに巻十末に「玉峯刻梓」の刊記がある。こ

れは建仁寺天潤庵住の玉峯正琳が、南北朝初期に開版した本邦最古の覆宋版碧巖録の重版を意味しており、天下の孤本として貴重である。

碧巖録は圓悟の弟子大慧宗杲(一〇八九—一一六三)から学人を惑わすものとして焼却され、閲覧を禁止されてから、しばらく顧みられなかったが、元・大徳年間(一一九七—一二三〇)張明遠が「宗門第一書」と冠し刊行して以来、禅林でひろく読まれたが、とりわけ臨済宗で重視され、京・鎌倉の五山を中心にししばしば出版された。

(納富)

7 「対大己五夏閣梨法」断簡 道正庵切

寛元二年写 (道元自筆) 額装 二葉

通常「対大己法」と呼ばれるこの著述は、道元禪師が定めた『永平大清規』第二篇として書かれ、入門して程たため修行僧の、大己(先輩僧侶。修行五年は五夏、一〇年は閣梨)に対する礼法を、日常の起居振舞に即して、六二条にわたり説示されたものである。この断簡が道正庵切と呼ばれるのは、入宋した道元に随侍した俗弟子の木下道正が、帰国後京に薬舗を構えた庵(現在の京都市上京区道正町)に所蔵されていたとの伝えによるが、勿論定かではない。しかし本書巻末識語に当る断簡が出光美術館蔵国宝手鑑『見ぬ世の友』に収められ、「于時日本寛元二年甲辰三月二十一日」なる年記と「道元(花押)」と署名までも見られるので、同じく自署を有する永平寺蔵国宝『普観坐禅儀』と並び、極めて稀な道元真筆墨蹟の中で、自筆か否かを鑑定する上での根本真蹟資料となっている。道元四五歳、壮年期の筆である。自筆原本は、斐紙の一面に白界六行を施し、共紙

表紙とも一〇丁二〇面より成っていた粘葉装の冊子と推定されるが、遺存するのは本学の二面（二頁）を含めて、わずかに五面と三行である。そのうち本学の切（一）は縦二三・九、横一四・四種、第二四末より第二八までを記し、京都国立博物館蔵国宝手鑑『藻塩草』所収の切の実に裏面に当り、（二）はやや四周を裁断して縦二三・二、横一二・七種で、これは第六〇より本文大尾の第六二まで、一行を余白にして終わっている。またこれも、一丁両面書きの裏面に当ると判明したので、先の出光の見開き二面の切と隣り合って糊で接し、しかも（二）の次に当る見開き左の面が何も書かれていなかったという巻末の書誌的狀態をも明らかにしたのである。なお他に遺るのはM O A 美術館蔵国宝手鑑『翰墨城』に一行が、田中塊堂氏旧蔵手鑑『都地久連』に二行が収められている。気迫の漲る道元の、典雅のうちに圭角を備え、鋭利、透徹、清澄の風韻漂う孤絶ある唐様の筆法が、観る者を圧倒するであろう。（池田）

### 8 才葉抄（藤原教長口伝）鎌倉時代末期写

（伝世尊寺行能筆） 卷子 一軸

書道伝書。萌黄色地に菱・牡丹唐草等を織出した緞子表紙。紙高一七・四種。見返しは金布目紙でいずれも後補。本文料紙、斐楮混漉。墨付一三紙、礼紙一葉を介し牙軸に付く。元来は縦一四、横二二種ほどの横本であつたらしい。現在の一紙は当然冊子一面分に相当する。残欠本となつてからの卷子改装であろう。外題なく、内題「宰相入道教長口伝」。歌人としても聞えた能書家藤原教長（一一〇九—一一七八—？）の伝書で、冒頭の「安元三年（一一七一）七月一日於高野山庵密談」によつて一応の成立年

代が知られる。筆受者は藤原伊経（？—一二二七？）。保元の乱に坐して常陸配流、のち召還され高野山に住む教長のもとには様々の文化人が訪れたようである。伊経の他、『才葉抄』口受の翌年顯昭（一一三〇—一二〇九？）も登山して『古今集註』の成立にあずかつたらしい（京都大学蔵『古今集註』奥書）。なお教長は14名城切の筆者と推定されている。

『才葉抄』はその収載項目数によつて大きく二四八条本・四八条本・八八条本に分類され、掲出本は四八条本に属する。が、第四一・二四・第二六・三四・三六条を欠き、逆に通行の四八条本には見えないもの二条を持つ。したがつて現在二五条存。『才葉抄』中おそらく最古伝本か。しかも古写本の常としての字句の異同のみならず、たとえば、三七・三八・四六の如く通行本とは大きく配列が異なり、前記の脱落は勿論見のがせない欠陥だが、四八条本中の異本として意味の重い存在である。末尾に「五月八日 行能」と見え、伝称筆者はこれによつたもの。ただし本奥書であるか、一種の偽跋であるかは、なお議論の余地を残す。

古筆了榮（一六〇七—一六七八）の極札の他鑑定紙片二葉、さらに桐箱蓋裏には古筆了仲（一八二〇—一八九一）の識語が見える。（高田）

### 9 古今和歌集（兼好古今）室町時代中期写

列帖装 一冊

紺地に菊・牡丹唐草を織り出した金欄表紙。縦二五・〇、横一六・七種。左肩に龍文を刷つたかと思われる題簽の一部（「古」一字分）が残る。金紙に牡丹唐草を空刷りした見返。本文料紙、斐楮。墨付一五七丁。

綴じから見てもともと一冊本、ままた巻の変り目ごと余白一丁または半丁をおく。室町中期以前の写で、毎半葉一〇行（仮名序九行・真名序八行）、歌一首一行書、詞書二字下げ、朱声点・合点の他、同筆と覚しき片仮名・平仮名書入、かなり詳しい勸物あり。

仮名序、本文、真名序の次に「比集家々所稱」以下の貞応二年七月二二日本奥書を掲げ、改丁して、

「本云

曆應二年六月廿四日 壬子以

宗匠御本書写訖

同廿九日校合之 兼好

加朱点

判

吉田兼好（？—一三五二—？）は、南北朝動乱の世にあつて古典研究・書写に熱を入れ、古今集・拾遺集・八雲御抄・源氏物語を写し、『古今鈔』（現佚）の著もあつた。掲出本は建武五年（一二三三）に続く古今集書写。なお金沢文庫には兼好の筆跡に似た朱点・朱注を持つ古今集序が蔵され（星野直隆「兼好法師筆古今集仮名序のこと」金沢文庫研究六一四）、古今集の名物切である熱田切の筆者に擬せられる。（高田）

### 10 古今和歌集 室町時代中期写

列帖装 一冊

萌黄色地に鳳凰・鶴を織り出した緞子表紙。縦二二・八、横一五・八種。外題なし。銀切箔を密に蒔いた斐楮の見返し。なおこの見返し裏面には高さ一・九・三種、幅一・六種ほどの界が施され、古写経の反故を利用したものと推される。本文料紙、斐楮。

每半葉九行(仮名序八行、真名序七行)、歌一首一行書、詞書一字下げとし、同筆と思われる漢字・平仮名・片仮名書入れあり。卷一七雑上85、作者名「あま敬信」に「よるかの朝臣母列子ニツカヘタテマツルナリ」は、珍しい注か。墨付一六六丁。仮名序・本文・真名序の次に貞応二年七月二二日本奥書を書せる。

箱書「古今全部 東山殿筆」。古筆了任の極札にも「公方 慈照院義政公古今和歌集 全一冊(守村)」とあり、また足利義政(一四三六—一四九〇)の筆、外題は三条西実隆(一四五五—一五三七)の外題、価金十五枚と認められた元禄九年(一六九六)の古筆了任の折紙を添えるが、無外題の掲出本とは対応せず。先の極札を検するに、裏面天地に金箔の跡が残り、かつて典籍に貼られていた——通常見返しか扉に押す——ことが判明する。しかも掲出本には、相当する装飾料紙部分を欠くので、大幅な改装による外題脱落・見返し交換を考えない限り、極札や折紙の示す書物と掲出本とは一致しない。おそらく典籍の入れかえがおこなわれたと思われるが、室町中期の闊達な書風や前記の注など、見所の多い写本である。川越敏子(敬楓)氏より寄贈された。(高田)

### 11 古今和歌集 延宝貞享頃写(契沖筆)

列帖装 二冊

紺地に黄・白にて花菱を織り出した緞子表紙。縦二四・九、横一八・一。外題なし。見返し、金切箔・砂子を蒔いた斐紙。本文料紙、斐紙。每半葉一行歌一首一行書、詞書三字下げ。上冊は仮名序より卷一〇まで、巻ごとに改丁しすべて丁の裏面から書写する統一のとれた形式。下冊は卷一一より真名

序に至り、各巻丁の表よりの書写が多いけれど一貫してはいない。伝本系統を示す奥書はないが、貞応本系の本文である。ただし具体的に契沖写本の底本が何であったかはなお問題を残す。

下冊末に「此古今集全部二冊、契沖阿闍梨墨痕也、聊不涉議論者矣。文化元年三月 賀茂季鷹」の鑑定識語が見え、季鷹(二七五—一八四二)の証する通り、契沖(二六四〇—一七〇二)の筆跡と判断される。碩学の手写本として注目すべき点の多い典籍ではあるが、就中興味深いのは表記において所謂契沖仮名遣ではなく伝統的な定家仮名遣を用いていること、この書を底本として文化九年(一八一二)に清水浜臣門下川島蓮阿の模刻本が刊行されたこと、であろう。この模刻は本文から季鷹識語まで再現した版本ながら、真名序を略し、底本の仮名遣を契沖仮名遣に改めるなど、若干の手なおしが認められる。なお蓮阿の序文によれば、掲出本には上田秋成(一七三四—一八〇九)の極めが付せられていたらしい。惜しいことに現在これを欠く。

契沖の手写本はほぼ簡素な料紙の袋綴本に限られ、掲出本の如き緞子表紙列帖装、斐紙に丁寧な筆跡を見せて定家仮名遣で書写する点、学術的興味とは別の意図で作成されたものと推される。天和・貞享(一六八一—一六八八)頃の写か。

詳細な解題を付した複製(池田利夫編『契沖筆古今和歌集』)あり。(高田)

### 12 古今和歌集 豆本 江戸時代中期写

袋綴 二冊

利久単地銀欄表紙。縦八・五、横六・二。外題なし。見返し金紙。

間似合風薄手料紙の縦六種横三・五種ほどのスペースに、每半葉九行二七字とごく細字の書写、類のない豆本と言えよう。手なれた筆で終始一貫写し続ける技は驚嘆に値する。歌一首一行書、詞書二字下げ、書入なし。上冊墨付七四丁、下冊八一丁。仮名序、本文と続き墨滅歌までを書く。真名序奥書等ないが、貞応本系統の本文と思われる。

書写年代も新しく、特異な本文を伝えているわけでもないが、古今集の多様な楽しみ方がうかがえる愛すべき写本である。(高田)

### 13 古今和歌集断簡 平安時代後期写

(伝藤原伊行筆) 軸装 一幅

金揉箔散らし斐紙。縦二一・二、横一三・八。手沢の状態から見て、列帖装の丁ウラ面か。卷五秋下293・294を一面五行に写した典雅な古筆。

畠山牛庵および古筆了任の極札を添え、いずれも藤原伊行(一一一—一二七五)の手とするが、伊行筆跡たる戊辰切・葦手下絵朗詠集と比較して明らかに別筆、むしろ伊行より若干古い、しかも相当な書き手のもものではなからうか。

品のよい装飾料紙と行間をゆったりとった名筆ぶり、伝藤原公任筆公忠集切と料紙・筆跡共に似るが現在のところツレは管見に及ばない。博雅の君子の垂教を乞う。(高田)

(釈文)

もみちはのなかれてとまるみなとには

くれなるふかきなみやたつらん

なりひらの朝臣

ちはやふる神よもきかすたつたかは

からくれなるにみつくととは

14 古今和歌集断簡 今城切 治承元年写

(藤原教長筆) 軸装 一幅

藍澱染斐紙。縦二四・六、横一五・九。右端に糊付のあとが見え、粘葉装冊子本の丁のオモテ面に相当、縦二一・四、横一二・九の淡墨界中に六行書写を定式とするが、八行書きの断簡もある。掲出の切のように五行で余白の存する例は他にも報告されているが、これらのほとんどは文字特に詞書を削去して体裁をととのえたもので、古筆切にその例は多い。この切でもおそらく次の和歌の詞書「はくわかう よみ人しらず」が削られたのであろう。古今集巻十物名<sup>42</sup>・<sup>43</sup>を写す。

力強く重量感のある書風で、江戸時代より飛鳥井雅経(一一七〇—一二二二)筆の名物切として珍重され一〇〇枚以上伝存する。現在では三井文庫蔵「たかまつ帖」所収の奥書部分や『諸雑記』の記述により、治承元年(一一七七)八月藤原教長(法名観蓮)の書写と考えられており、同筆と思われる資料には二荒山本後撰集・和漢朗詠集長谷切・伴大納言絵巻詞書などがある。

『新撰古筆名葉集』によると「白・浅黄・萌黄」の三種の料紙を用いたことになるが、現在白・黄・茶・藍の四色が認められる。しかし、黄・茶は保存状態もしくは経年変化の結果の呈色とも考えられるので、白・藍以外の料紙については確定しがたい。白のものに比べ勿論藍の料紙の方が少なく、全体の二割にも満たないであろう。

筆者教長は崇徳院の近臣として参議正三位に至るが保元の乱に連座、常陸国配流となる。後、召還され和歌や書の道で重きをなした。今城切の名は今城

家(もと中山冷泉家)によるか。古筆別家了任の極札を添う。(高田)

(釈文)

なつくきのうへはしけれぬまみつの  
ゆくかたのなきわかこ、ろかな  
かつらのみや 源忠<sup>ホトコス</sup>  
あきくれとつきのかつらのみやはなる  
ひかりをはなとちらすはかりそ

15 古今和歌集断簡 中山切 鎌倉時代初期写

(伝藤原兼実筆) 軸装 一幅

金銀箔散らし・霞引・緑青による下絵等を施した美しい斐紙。縦一六・五、横一五・九。一面九一一行、古今集二〇巻を上下二冊に分写するのが通例のところ、四帖に写した列帖装であった。『紫式部日記』寛弘五年(一一〇八)十一月八日の古今・後撰拾遺三代集を各五冊仕立てとした記事が参考となる。なお巻一一・一五を収めた九条家旧蔵の第三帖が、原態のまま伝存する。

掲出の分は巻二春下<sup>132</sup>下句<sup>134</sup>詞書に相当し、新出の一枚である。金銀の華やかな装飾に加え、紺青・緑青等の顔料を用いた下絵はことに珍しく、後京極様の力強い書風と相俟って、鎌倉時代初期を代表する尤品となっている。久曾神昇「中山切 古今和歌集」によれば、俊成本系のうち特に建久二年本・永暦二年本に近い本文を持つ。

なおこの切を伝称通り兼実(一一四九—一二〇七)の筆と認め、治承三年(一一七九)頃の写しとする説も、前掲久曾神著によって強力に主張されているが、兼実自筆資料と比較してやはり別手とすべきであろう。(高田)

(釈文)

ちるはなことにたくふこ、ろか  
やよひのつこもりの日あめの  
ふりけるにふちのはなをおり  
て人につかはしける  
なりひらの朝臣  
ぬれつ、そしみておりつるとしのうちに  
はるはいくかもあらしとおもへは  
亭子院の哥合のはるのはて  
の哥  
みつね

16 後撰和歌集 零本 室町時代初期写

列帖装 一冊

松葉色地に中小紋を織り出した緞子表紙。縦一四・五、横一三・七の升型本。外題なし。見返し金布目紙。本文料紙、斐紙。ただし巻首の一丁は後補。外側黒漆塗、内側梨地の箱に収む。

巻九までを存し、巻六・九に都合五丁の切取りが見られる。二〇巻を上下二冊に写したものの上冊で、元来一〇巻分六括あったか。現在五括墨付一五五丁を残す。歌一首二行書、詞書一字下げ、本文と別筆の朱書入りあり。

後半を欠くので当然奥書不明だが、巻八<sup>140</sup>の次の特異歌を持たない定家本系貞応本・天福本に属する。巻四<sup>200</sup>を欠くのは誤脱か。また巻六<sup>348</sup>左註を詞書と同じ高さに書き、次の歌との間に二行分すなわち歌一首分の空白を置くのは、左註を詞書と誤認し、当然ながら相当する歌がないので空けておいたものと考えられる。

上記の如き欠陥もあるものの、室町時代を下るこ

とのないと思われる朱勘物は注目に値するであろう。天福本系為相本墨書勘物に往々一致するが、たとえば卷一46左註勘物の藤原兼輔任参議「延喜廿一年正月参議左中将如元々藏人頭」(為相本「延喜廿一年正月参議中将如元」)のように、掲出本の方が詳しく、かつ史実としても正確(兼輔は延喜二十二年正月に参議)である例が多い。

現在卷末となっている部分の余白左下に「すみつき□□」と覚しき墨書を削去した跡あり。(高田)

### 17 拾遺和歌集断簡 筑後切 鎌倉時代後期写

(伏見天皇筆) 軸装 一幅

藍内曇斐紙。縦二七・九、横九・一。ツレが卷子本として存し、原態は明か。しかし多くの切に折り目が見られ、一時期折本となっていたらしい。また仏典が裏文学で写っている資料もあって、伝来過程に多くの問題を残す。

歌人として、また能書家として聞えた伏見天皇(一二六五—一三二七)の筆跡、広沢切と共に古くより喧伝される。筑後切は古今・後撰・拾遺の三代集を気品高い内曇料紙六〇巻に書写したもので、一卷分完全に残る後撰集卷二〇末に「永仁二年十一月五日書訖」とあり、天皇三〇才の折の筆と判明する。古今集の場合は卷一八の零本が、後撰集には前述の如く卷二〇の完本が伝存、しかし拾遺集では卷一六の九首分が一軸としてまとまるのみ(徳川美術館)で、あとはすべて断簡。ゆったりと温雅な書風で歌一首三行書写を定式とし、世上筑後切と称する散らし書きの資料もあるが、やや疑わしい。稀に後人が下絵を描き入れたものも存する。

掲出の切は卷二〇1311、左端に折り目の跡が残る。

拾遺集卷末本奥書部分が伝えられており(たかまつ帖)、貞応元年(一二二二)九月七日藤原定家(一一六二—一二四一)の校訂書写した系統であることとなる。貞応元年六〇才の定家は古典書写に力を尽し、三代集だけでも七部の書写が報告されている。筑後切の貞応元年九月七日日本は、従来知られていなかった系統で、伏見天皇による若干の取捨変更も想定される(杉谷寿郎「拾遺集定家貞応元年九月七日書写本考」『語文』七八)。古筆了珉(二六四五—一七〇二)の極札を付し、その裏面に「切歌一首<sup>丁</sup>丑七」とあるのは元禄一〇年(二六九七)丁丑七月の謂。(高田)

(釈文)  
はるは花あきはもみちと  
ちりはて、たちかへるへき  
このもともなし

### 18 千載和歌集断簡 日野切 文治四年頃写

(藤原俊成筆) 軸装 一幅

斐紙。縦二一・五、横一四・八。料紙欠損少々あって綴穴が確認しにくい。列帖装、丁オモチ面か。卷一九釈教1235、1237を写す。第二首目「あか□き」は料紙の欠損。

藤原俊成(一一二四—一二〇四)の古筆切中、自ら撰した千載集の断簡ゆえにひととき珍重されるものの一。現在卷一〇以下のみが存し、上下二帖のうち下帖分の分割と知れる。「明月記」天福元年(一二三三)七月二〇日の「家本之下帖」と関係あるか。一帖一四〇丁ほどと推定(田村悦子「藤原俊成自筆千載集断簡日野切の考察とその集成」『美術研究』二二三)され、その半分程度が発見されている。烏丸光広(一一五七—一二一六)識語を持つ切や冷泉為頼(一一五七—一二一六)の箱書ある資料も見え、江戸初期にはすでに断簡となっていた。切名称は日野家伝来たることによるか。

千載集成立を序文にしたがって一応文治三年(一一八七)とすれば、俊成七〇代以降の老筆となるが、鋭い転折やよどみない墨痕は、源平動乱の世を生きぬいた巨匠にふさわしい迫力に満ちている。

日野切は、その書写形態から、千載集の草稿ではなく、一種の撰者手控本と判断され、掲出の切にはないが作者名に細字注を付す例など、撰者自筆資料であるだけに注目すべき点が多い。

二重箱入。内箱蓋表に「日野切 おとろかぬ」、蓋裏に「藤原俊成卿筆 義〔花押〕」と墨書するのは吉沢義則(一一八七—一二五四)の手。古筆本家の極札「五条三位俊成卿 おとろかぬ〔琴山〕」を脇に貼る。

(高田)

(釈文)

おとろかぬわかこ、ろそうかりけれ  
はかなきよをはゆめとみなから  
高野にまいりてよみ待ける  
寂蓮法し

あか□きをたかの、やまにまつほとや  
こけのしたにもありあけの月

煩惱即菩提のこ、ろをよめる

式子内親王の中將

おもひとくこ、ろひとつになりぬれば  
こほりもみつもへたてさりけり

### 19 新古今和歌集断簡 西山切

鎌倉時代中期写(伝高倉清範筆) 軸装 一幅

斐紙。縦一六・五、横九・七。元来縦一七、横